平成６年度

市原市内遺跡発掘調査報告

西国吉新林遺跡（にしくによししんばやしいせき）

姉崎六孫王原遺跡Ｆ区（あねさきろくそんのーばらいせきえふく）

菊間深道遺跡Ｂ地点（きくまふかみちいせきびーちてん）

1995・3

市原市教育委員会

序　　文

去る１月17日未明、阪神地方をおそった阪神大震災は、５千名を超える犠牲者と30万人以上の被災者を出す等、大きな被害をもたらしました。不幸にも震災にあわれた方々に対し、心よりお見舞い申し上げるとともに、甚大な被害を被った街並みが一日も早く復興されることを願っておりますことをまず冒頭に申し上げたいと思います。

さて市原市は房総半島の中程にあって、豊かな自然と温暖な気候とに恵まれ、太古より多くの人々がくらし、さまざまな足跡をしるしてきたところです。

このことは、県下でも有数の規模を誇ります、山倉天王貝塚や史跡上総国分僧寺跡・尼寺跡などに代表されるところであります。

また、本市は首都圏のベットタウンとして宅地開発やゴルフ場造成など様々な開発がおこなわれ今後も多様な開発が予想されるところであります。一方、「こころの豊かさ」を求める風潮とあいまって、生涯学習に対する関心も年々高まり、そのことは一昨年８月にオープンしました、史跡上総国分尼寺跡展示館の入場者が早くも２万人をこえることからも伺えます。

開発と文化財保護の調整をいかに図るかという課題は、文化財保護をはかる側に、常に突きつけられている課題ですが、生涯学習意欲の高揚にともなって、今後はその保護をはかりつつ、如何に活用するかという課題にも、より一層心を砕いていく必要があろうと感じているところです。

本書は、国庫および県費の補助をうけて発掘調査を実施した、市内の遺跡の発掘調査の成果を纏めたものです。本報告が市の歴史の理解をするための一助となれば幸いです。多方面の方に、大いに活用されることを望んでやみません。

最後に、今回の調査を実施するにあたり御指導・御協力を賜りました、文化庁・千葉県教育委員会・財団法人市原市文化財センターならびに関係諸機関に対しまして、心より感謝の意を表する次第で有ります。

平成７年３月

市原市教育委員会
教育長　大　野　　皎

例　　言

1　本書は国庫および県費の補助を受けて市原市教育委員会が主体となり実施した市内に所在する遺跡における発掘調査の概要の報告書である。

2　発掘調査および整理事業は文化庁の国庫補助事業として補助金を受けた市原市教育委員会の依頼により、財団法人市原市文化財センターが実施し、報告書印刷刊行については市原市教育委員会で行った。

3　今年度実施した発掘調査は下記のとおりである。

⑴　**西国吉新林遺跡**　（センター調査コード185）市原市西国吉字新林1,667－7ほか

調　　査　　宅地造成と店舗建設に伴う確認調査ならびに一部本調査で、工事に先行して調査対象面積1,213㎡のうちの120㎡（確認調査）と160㎡（本調査）を発掘した。

調査期間　　平成６年８月４日～平成６年８月23日

⑵　**姉崎六孫王原遺跡Ｆ区**（センター調査コード187）市原市姉崎字六孫王原3,225－5、3,225－8

調　　査　　個人による宅地造成に伴う確認調査で、工事に先行して調査対象面積2,175.94㎡のうち217㎡を発掘した。

調査期間　　平成６年８月24日～平成６年９月20日

⑶　**菊間深道遺跡Ｂ地点**（センター調査コード192）市原市菊間字深道1,973の一部

調　　査　　社会福祉施設建設に伴う確認調査で、工事に先行して調査対象面積2,392㎡のうち240㎡を発掘した。

調査期間　　平成６年11月21日～平成６年12月13日

4　現地調査ならびに整理作業・原稿執筆は、田所　真が担当した。

5　本書に使用した地形図は、国土地理院発行の１：25,000地形図「上総横田」「鶴舞」「姉崎」「蘇我」、市原市発行の１：25,000地形図である。

6　現地調査の記録に使用した「北」は、すべて「磁北」である。なお、姉崎六孫王原遺跡Ｆ区並びに菊間深道遺跡Ｂ地点の報告では、地形図上で座標値内に塡め込んだものを掲載した。

7　第８図ならびに第９図の作成にあたって、『千葉県重要古墳群測量調査報告書－市原市姉崎古墳群－』千葉県教育委員会（1994）所収の墳丘測量図ならびに、中村恵次ほか『古墳時代研究Ⅱ－千葉県市原市六孫王原古墳の調査－』古墳時代研究会（1975）所収図面を転載し加除のうえ利用している。記して、謝意を表します。

8　第10図の作成にあたって、『市原市菊間遺跡』財団法人千葉県都市公社（1974）所収図面ならびに高橋康男『平成５年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会（1994）所収の菊間深道遺跡全体図を転載し、加除のうえ利用している。また、東関山古墳の墳丘規模を復原検討するにあたって、永沼律朗氏より資料の提供を得ている。記して、謝意を表します。

本　文　目　次

序　文
例　言
Ⅰ　調査の概要と遺跡の環境 …… 1
Ⅱ　西国吉新林遺跡 …… 6
Ⅲ　姉崎六孫王原遺跡Ｆ区 …… 9
Ⅳ　菊間深道遺跡Ｂ地点 …… 13
報告書抄録

挿　図　目　次

Ⅰ　第１図　平成６年度「市内遺跡」調査位置図 …… 2
第２図　西国吉新林遺跡と周辺の遺跡 …… 3
第３図　姉崎六孫王原遺跡Ｆ区と姉崎古墳群 …… 4
第４図　菊間深道遺跡と周辺の遺跡 …… 5
Ⅱ　第５図　西国吉新林遺跡全体図 …… 7
第６図　吉野63号墳と出土の遺物 …… 8
Ⅲ　第７図　姉崎六孫王原遺跡全体図 …… 10
第８図　姉崎六孫王原遺跡Ｆ区全体図 …… 11
第９図　六孫王原古墳全体図 …… 12
Ⅳ　第10図　菊間深道遺跡全体図 …… 14
第11図　菊間深道遺跡Ｂ地点全体図とＳＩ－0001 …… 15
第12図　菊間深道遺跡Ｂ地点出土の遺物 …… 16

写 真 図 版 目 次

Ⅱ　図版１　西国吉新林遺跡
1　吉野63号墳主体部（南側から）
2　吉野63号墳主体部（西側から）
3　副葬された鉄鏃（西側から）
4　吉野63号墳全景（西側から）
5　須恵器出土状況（南側から）
6　土師器杯出土状況（南側から）
7　土師器甕出土状況（東側から）

			8	土師器甕出土状況（北側から）
	図版２	西国吉新林遺跡	9	周溝西側土層堆積状況（南側から）
			10	周溝南側土層堆積状況（西側から）
			11	副葬品（鉄鏃）－１
			12	副葬品（鉄鏃）－２
			13	周溝出土品（須恵器）
			14	周溝出土品（土師器杯）
			15	周溝出土品（土師器甕）
			16	主体部掘方検出状況（東側から）
Ⅲ	図版３	姉崎六孫王原遺跡Ｆ区	17	Ｆ区全景（西側上空から）
			18	Ｆ区近景（西側から）
			19	No.1トレンチ遺構確認状況（北側から）
			20	No.2トレンチ遺構確認状況（北側から）
			21	No.5トレンチ遺構確認状況（北側から）
			22	No.11 トレンチ北側遺構確認状況（北側から）
			23	No.13 トレンチ遺構確認状況（南側から）
			24	No.13 トレンチ遺構確認状況（北側から）
	図版４	姉崎六孫王原遺跡Ｆ区	25	六孫王原古墳とトレンチ（西側上空から）
			26	六孫王原古墳近景（北西側から）
			27	No.4トレンチ遺構確認状況（北側から）
			28	No.4トレンチ周溝検出状況（北側から）
			29	No.4トレンチ周溝土層堆積状況（北西側から）
			30	No.7トレンチ遺構確認状況（北側から）
			31	No.8トレンチ周溝検出状況（北側上空から）
			32	No.10 トレンチ周溝検出状況（北側上空から）
Ⅳ	図版５	菊間深道遺跡Ｂ地点	33	No.1トレンチＳＩ－0001検出状況（東側から）
			34	No.2トレンチ遺構確認状況（北東側から）
			35	No.3トレンチ遺構確認状況（北東側から）
			36	No.4トレンチ遺構確認状況（北東側から）
			37	No.3トレンチ遺物出土状況（北西側から）
			38	No.1トレンチ遺物出土状況（北西側から）
			39	No.6トレンチ遺構確認状況（南西側から）
			40	No.5トレンチ遺構確認状況（南西側から）
	図版６	菊間深道遺跡Ｂ地点	菊間深道遺跡Ｂ地点出土遺物	

Ⅰ　調査の概要と遺跡の環境

［調査の概要］

平成６年度の「市内遺跡発掘調査（市内遺跡）」は、当初計画４遺跡700㎡に対して、３遺跡737㎡という実績であった。この内、確認調査と本調査を実施した遺跡は、個人による宅地造成にかかる西国吉新林遺跡（吉野63号墳）一件のみであり、他の２遺跡については、確認調査のみの実施であった。各々の調査対象面積、調査面積ならびに調査期間は、例言記載のとおりである。

確認調査は、調査対象面積の約10％を目処に、任意に設定したグリッドあるいはトレンチによって実施し、対象地全域に均一的に配置することを原則とした。

調査区の設定ならびに遺構の記録等において、公共座標は用いていない。

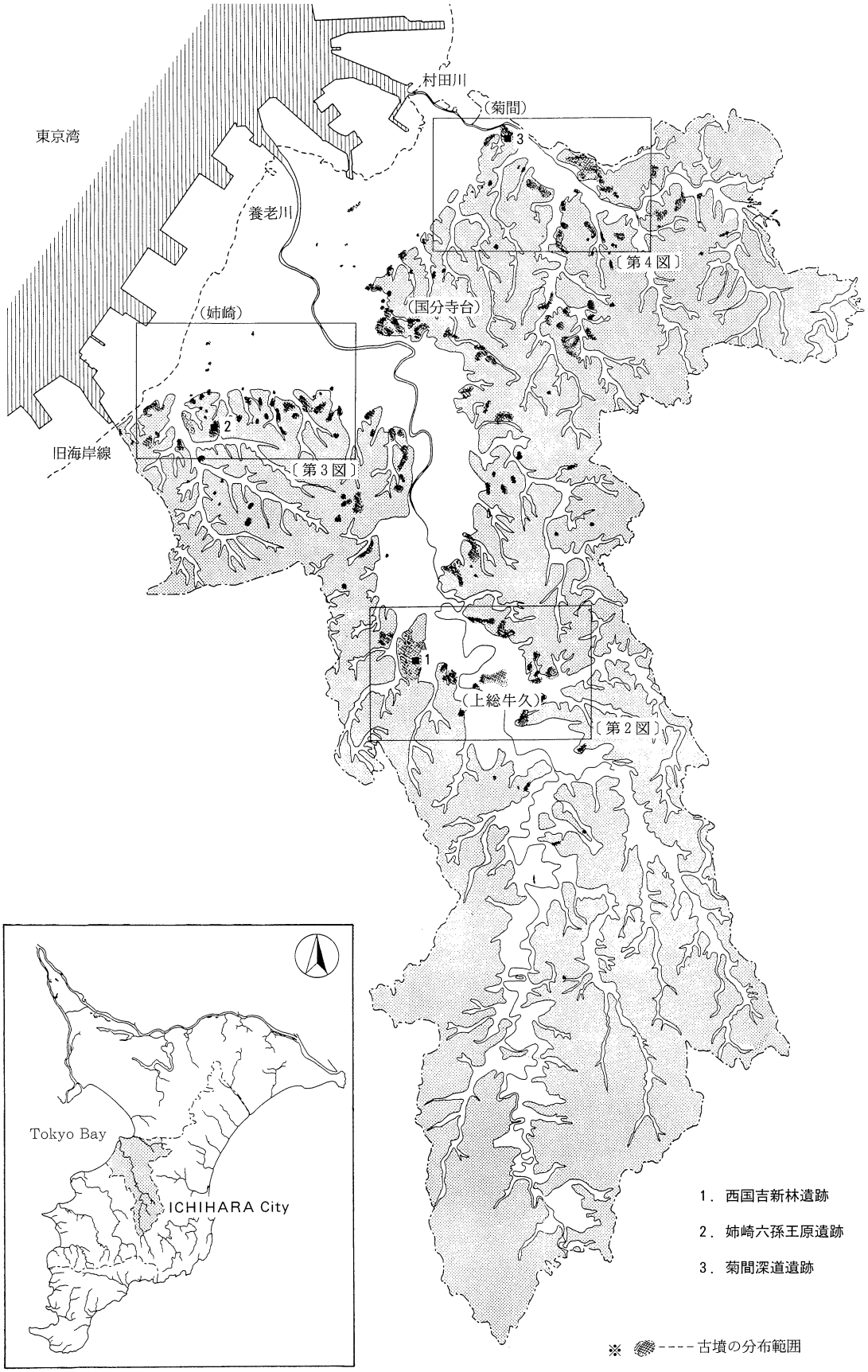
遺構の記録等に用いた水準は、調査地点近隣に知られているものを利用した。

西国吉新林遺跡と、姉崎六孫王原遺跡Ｆ区の表土除去ならびに埋め戻しには、重機を用いた。

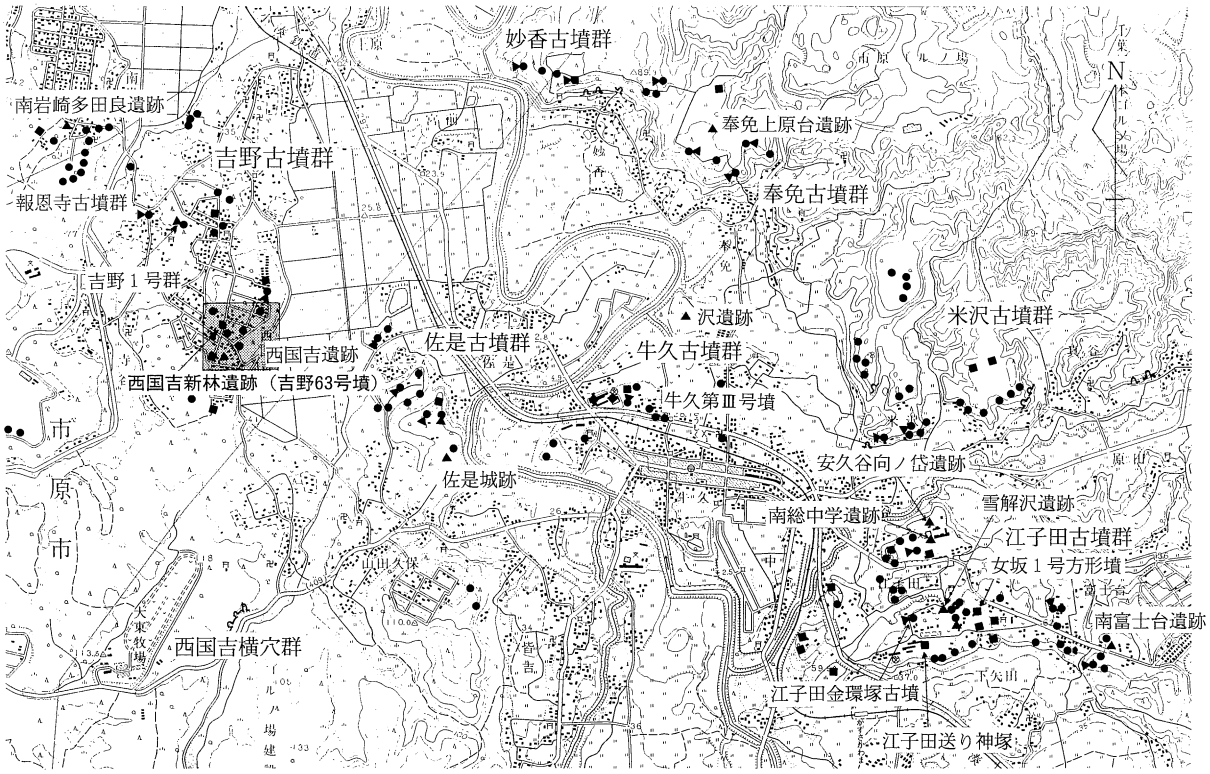
［遺跡の環境］

平成６年度に実施した３遺跡は、期せずして市内を代表する古墳群（姉崎古墳群－姉崎六孫王原遺跡Ｆ区・菊間古墳群－菊間深道遺跡Ｂ地点・養老川中流域－吉野古墳群－西国吉新林遺跡）に、それぞれあたっている。以下、歴史的環境に視点を置いて、各遺跡に触れておくこととしたい。

弥生時代の中期以降に南関東地域では、方形周溝墓の築造が盛んとなってくる。**姉崎六孫王原遺跡**では既に盛土の残存する方形周溝墓が確認されている。これらは明瞭な墓域をもって、規則的な配置で築造されていく傾向にある。養老川対岸下流地域に当たる諏訪台遺跡でも同様の様相が確認されている上、中流域の安久谷向ノ岱遺跡から南総中学遺跡にかけてでも、類似した傾向を指摘することができる。恐らくは、古墳群の形成されるような範囲にあって、前代には類似した環境が展開していたものと考えられよう。方形周溝墓群の規則的な配置とは別に、同一墓域内で、周溝を巡らさない墓が稀に存在する。時として、この単独の墓はガラス製のビーズ玉などを副葬させていることがある。地域的な、或いは血縁的な紐帯の基に築造されていく墓の中に、異色なものの萌芽を感じさせる。墓域の中に集落は形成されないが、かっての集落地域に墓域の広がる場合が見られるようである。このことは、弥生時代後期以来の集落が古墳時代前期の段階で消滅減少していくことと関連するものと考えられる。具体例としては、**菊間深道遺跡**以外にも西国吉遺跡や諏訪台遺跡等にも見ることができる。この時期の住居から、土製の勾玉が出土している。市原市域における古墳時代前期の小型古墳は、概ね方墳系である。これに対し、中期から後期は円墳系の古墳が群集する傾向にあり、この間には連続性が認めにくい。恐らく、古墳時代前期の小型古墳形成以降、各地区の首長層の権力の再編成と集約への過程の中で、不連続と不均衡が生じざるをえなかったのであろう。姉崎古墳群が肥沃な可耕地と制海権の確保の上に成立した歴史的モニュメントであることは、想像にかたくない。しかし、市原市域の古墳時代の全体を通してみると、常に姉崎古墳群が優位を保ち続けていたとは言いがたい。特に古墳時代後期後半以後の姉崎古墳群は、それまでの生彩さに比べると見るものが少ない。一方、養老川中流域の古墳は、古墳時代後期に生彩さを魅せはじめる。江子田瓢箪塚や吉野１号墳にその好例を見ることができよう。**西国吉新林遺跡**の吉野63号墳は、その魁を予感させている。さて、市原市域の古墳築造は、姉崎六孫王原古墳の前方後方墳に代表されるように、方墳系でその終わりを迎える。



第１図　平成６年度「市内遺跡」調査位置図



第２図　西国吉新林遺跡と周辺の遺跡

［ＤＡＴＡ－１］

挿図データ

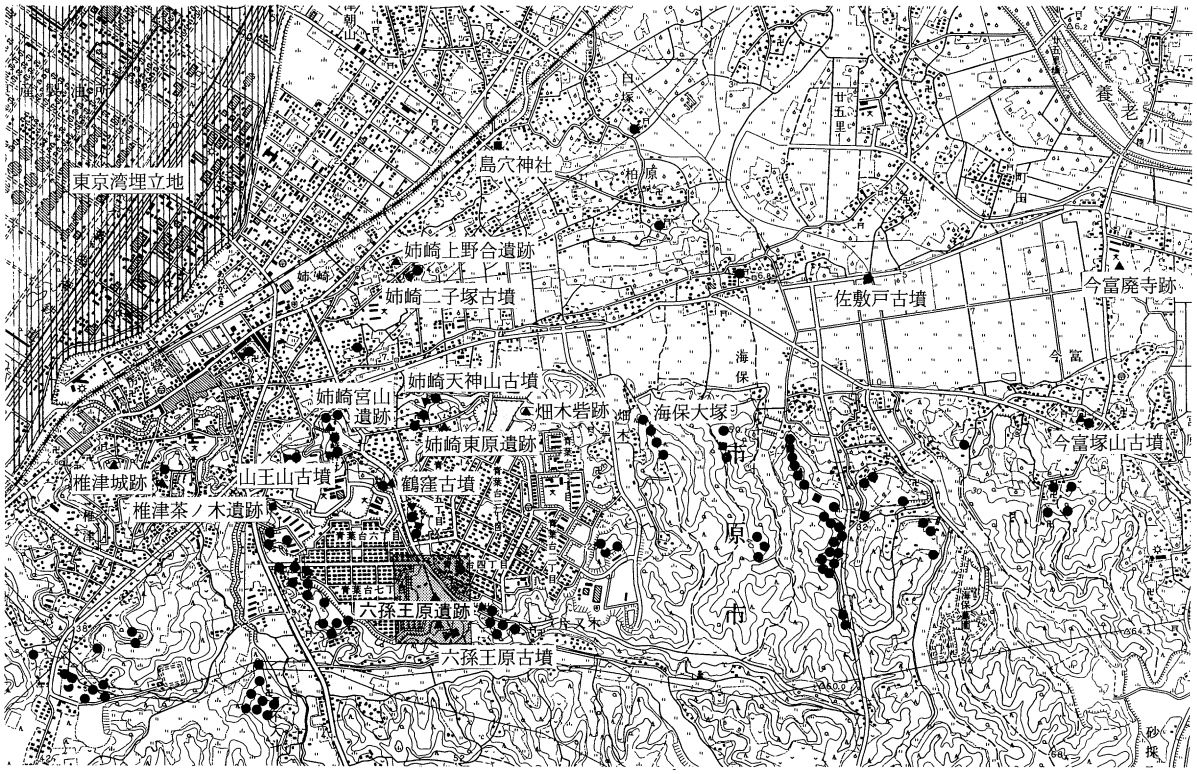
1　地形原図－国土地理院発行1:25,000
　　地形図　N1-54-19-16-4 上総横田（千葉16号－４）の一部ならびに、N1-54-19-16-2 鶴舞（千葉16号－２）の一部を使用した。

2　分布状況－古墳の分布については、『千葉県所在古墳詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会（1991）所収分布図をベースとし、調査成果等によって加筆掲載した。
　　包蔵地等については、『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図－南部編－』市原市教育委員会（1988）所収分布図をベースとし、関連報告書等記載事項ならびに現地踏査結果によって加筆掲載した。

3　掲載縮尺－原図の約66.3％である。

主要文献データ

青木　豊他「千葉県西国吉遺跡の発掘調査」『月刊考古学ジャーナル №96』ニューサイエンス（1974）
浅利　幸一「江子田送り神塚」『平成４年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会（1993）
石井　　昭「牛久古墳群発掘概報」『市原地方史研究第７号』市原市教育委員会（1970）
忍澤　成視「安久谷向ノ岱遺跡」『平成２年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会（1991）
忍澤　成視「南岩崎多田良遺跡」『平成２年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会（1991）
金丸　　誠『市原市雪解沢遺跡』財団法人千葉県文化財センター（1984）
倉田芳郎他『千葉・南総中学遺跡』市原市教育委員会（1978）
近藤　　敏『南富士台遺跡』財団法人市原市文化財センター（1987）
柴田　龍司「佐是城跡」『千葉県中近世城郭研究調査報告書第６集』千葉県教育委員会（1985）
杉山晋作他『千葉県市原市西国吉横穴群』西国吉横穴群発掘調査団（1977）
清藤一順他「吉野１号墳、南岩崎吉野遺跡」『昭和62年度市原市埋蔵文化財緊急調査報告書』市原市教育委員会（1988）
武田宗久他「上総国女坂１号方形墳」『南総郷土文化研究会叢書第９巻』南総郷土文化研究会（１９６３）
武田　宗久「南総町江子田瓢箪塚古墳」『千葉県遺跡調査報告』千葉県教育委員会（1964）
武田宗久他『上総江子田金環塚古墳発掘調査報告書』市原市教育委員会（1985）
田所　　真「佐是城跡」『市原市文化財センター年報－平成２年度－』財団法人市原市文化財センター（1994）
田中　喜作「江子田送り神集落について」『郷土史年表（付史料）』（1969）
田中清美他『奉免上原台遺跡』財団法人市原市文化財センター（1992）
中村　恵次「千葉県養老川流域の古墳についての一考察（再録）」『市原市周辺地域の調査』市原市教育委員会（1967）
二宮　栄学「米沢横穴群調査概報（第１次）」『市原地方史研究第７号』市原市教育委員会（1970）
増田精一他「牛久第Ⅲ号墳調査抄報」『千葉県埋蔵文化財抄報３』千葉県教育委員会（1972）
米田耕之助他『沢遺跡』財団法人市原市文化財センター（1987）



第３図　姉崎六孫王原遺跡Ｆ区と姉崎古墳群

［ＤＡＴＡ－２］

挿図データ

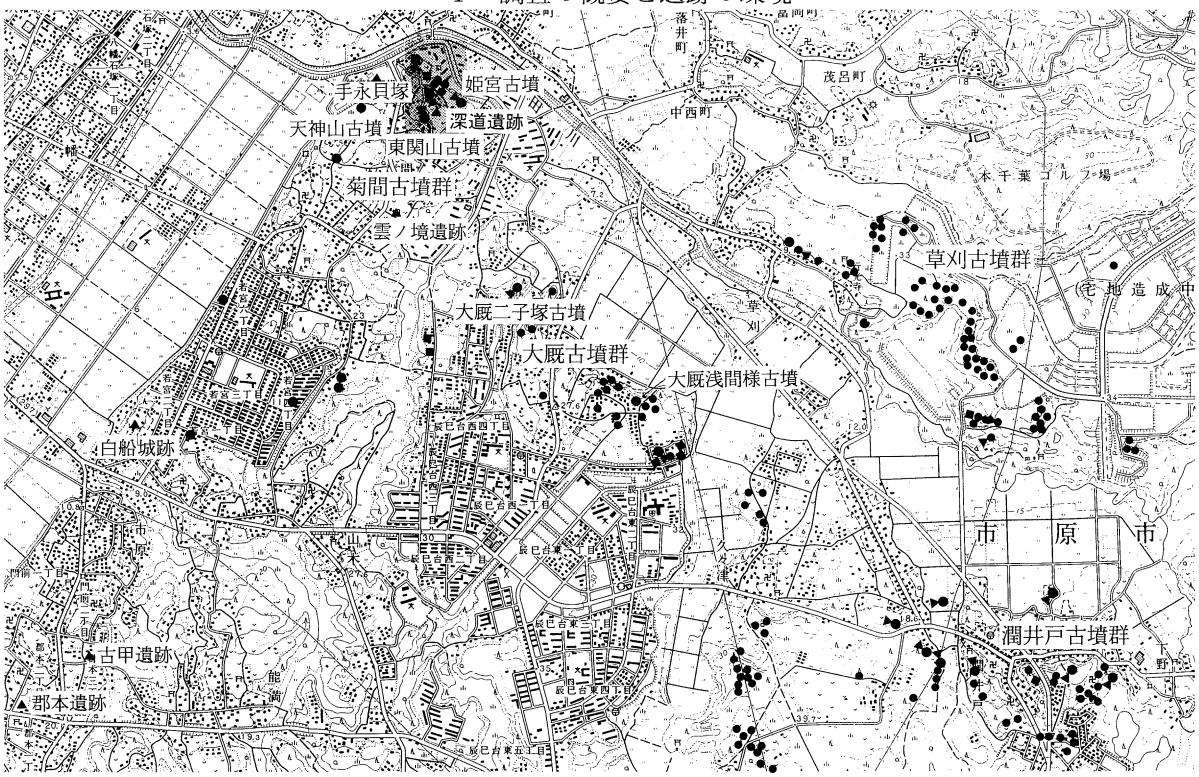
1　地形原図－国土地理院発行1:25,000
　　地形図　N1-54-19-16-3 姉崎
　　（千葉16号－３）の一部を使用した。

2　分布状況－古墳の分布については、『千葉県所在古墳詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会（1991）所収分布図をベースとし、調査成果等によって加筆掲載した。
　　包蔵地等については、『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図－南部編－』市原市教育委員会（1988）所収分布図をベースとし、関連報告書等記載事項ならびに現地踏査結果によって加筆掲載した。

3　掲載縮尺－原図の約66.3%である。

主要文献データ

浅利　幸一「姉崎東原遺跡Ｄ地点」『平成４年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会（1993）
大場磐雄・亀井正道「上総国姉ケ崎二子塚発掘調査概報」『考古学雑誌』37－３（1951）
大場磐雄ほか『姉崎山王山古墳』市原市教育委員会（1963）
大村　　直「Ⅱ　姉崎宮山遺跡」『不特定遺跡発掘調査報告⑵』市原市教育委員会・財団法人市原市文化財センター（1991）
忍澤　成視「姉崎東原遺跡Ｂ地点」『平成２年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会（1991）
越川敏夫ほか『原遺跡』原遺跡調査会（1984）
木對　和紀「姉崎上野合遺跡」『平成元年度市原市内遺跡群発掘調査報告書』市原市教育委員会（1990）
木對　和紀『市原市椎津茶ノ木遺跡』千葉ホーム株式会社・財団法人市原市文化財センター（1992）
木對　和紀「22. 六孫王原遺跡（Ａ区・Ｂ区）」『市原市文化財センター年報昭和63年度』財団法人市原市文化財センター（1994）
小出　義治ほか『上総山王山古墳』市原市教育委員会（1980）
近藤　　敏「23. 六孫王原遺跡（Ｄ区）『市原市文化財センター年報昭和63年度』財団法人市原市文化財センター（1994）
高橋　康男『市原市姉崎東原遺跡』株式会社新昭和住宅・財団法人市原市文化財センター（1990）
高橋　康男「六孫王原遺跡Ｅ地区」『平成３年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会（1992）
田中　清美「⑸姉崎山谷遺跡」『不特定遺跡発掘調査報告⑴』市原市教育委員会・財団法人市原市文化財センター（1989）
千葉県教育委員会『千葉県重要古墳群測量調査報告書－市原市姉崎古墳群－』千葉県教育委員会（1994）
永沼　律朗『市原市今富塚山古墳確認調査報告書』千葉県教育委員会（1992）
中村恵次ほか『古墳時代研究Ⅱ－千葉県市原市六孫王原古墳の調査－』（1975）
八角憲章ほか『千葉県市原市毛尻遺跡発掘調査報告書』毛尻遺跡調査会（1983）
平野元三郎ほか『市原市二才山調査概報』二才山調査団（1981）
福間　　元ほか『千葉県市原市今富地区遺跡発掘調査報告書』市原市今富地区遺跡調査会（1982）
丸子　　亘『姉ケ崎台遺跡発掘調査概報』千葉県教育委員会（1970）



第４図　菊間深道遺跡と周辺の遺跡

［ＤＡＴＡ－３］

挿図データ

1　地形原図－国土地理院発行1:25,000
　　地形図　N1-54-19-15-2 蘇我
　　（千葉15号－２）の一部を使用した。

2　分布状況－古墳の分布については、『千葉県所在古墳詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会（1991）所収分布図をベースとし、調査成果等によって加筆掲載した。
　　包蔵地等については、『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図－北部編－』市原市教育委員会（1988）所収分布図をベースとし、関連報告書等記載事項ならびに現地踏査結果によって加筆掲載した。

3　掲載縮尺－原図の約66.3％である。

主要文献データ

浅利　幸一「大厩浅間様古墳」『市原市文化財センター年報昭和59年度』財団法人市原市文化財センター（1985）
浅利　幸一「第４章　大厩鍛冶屋前遺跡」『平成４年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会（1993）
市毛　勲ほか「若宮遺跡（Ｃ地区）」『市原市周辺地域の調査』土師書院（1967）
大村　　直『市原市大厩弁天台遺跡』財団法人市原市文化財センター（1989）
大村　　直『市原市姉崎宮山遺跡・小田部向原遺跡・雲ノ境遺跡』市原市教育委員会・財団法人市原市文化財センター（1991）
忍澤　成視「第４章　草刈尾梨遺跡」『平成２年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会（1991）
忍澤　成視「第７章　山木白船城跡遺跡」『平成２年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会（1991）
木對　和紀「第２章　潤井戸上横峰遺跡」『平成元年度市原市内遺跡群発掘調査報告』市原市教育委員会（1990）
近藤　　敏「菊間手永貝塚」『市原市文化財センター年報昭和57・58年度』財団法人市原市文化財センター（1985）
近藤　　敏「第５章　定堀込遺跡」『昭和63年度市原市内遺跡群発掘調査報告』市原市教育委員会（1989）
斎木　勝ほか「新皇塚古墳」『市原市菊間遺跡』財団法人千葉県都市公社（1974）
斎木　勝ほか「菊間遺跡」『市原市菊間遺跡』財団法人千葉県都市公社（1974）
坂井利明ほか「南大広遺跡」『市原市埋蔵文化財調査報告４』市原市教育委員会（1968）
三森俊彦ほか『市原市大厩遺跡』財団法人千葉県都市公社（1974）
鈴木　英啓『潤井戸西山遺跡』財団法人市原市文化財センター（1986）
高橋　康男『草刈遺跡』財団法人市原市文化財センター（1985）
高橋　康男「1. 狩豆柵遺跡」『市原市文化財センター年報昭和61年度』財団法人市原市文化財センター（1986）
高橋　康男「8. 潤井戸小谷１号墳」『市原市文化財センター年報昭和63年度』財団法人市原市文化財センター（1994）
高橋　康男「第５章　菊間深道遺跡」『平成５年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会（1994）
武部喜充ほか『千葉県市原市辰巳ケ原遺跡発掘調査報告』市原市辰巳ケ原遺跡調査会（1983）
田中　清美「3. 大厩細野遺跡」『市原市文化財センター年報昭和63年度』財団法人市原市文化財センター（1994）
米田耕之助「第２章　菊間向原遺跡」『昭和62年度市原市埋蔵文化財緊急調査報告書』市原市教育委員会（1988）

Ⅱ　西国吉新林遺跡

［調査開始時点での現況と地形］

調査開始時点における現況は、雑木林の伐採ならびに撤去直後の状況にあった。地形的には、南下がりの緩傾斜であった。なお、№7グリッドならびに№8グリッドによる表土下の状況確認において、吉野台団地造成段階における盛土堆積が、調査区の南側部分に認められた。造成以前には調査区の南側に、浅い谷が入り込んでいた可能性を、指摘することができる。（ｃｆ．第5図）

［発見された遺構］

確認された遺構は、木棺直葬を主体部とする古墳1基のみであった。北側半分弱が削平されているが、周溝外側確認面で直径15.6m前後、周溝内側立ち上がり部分における復原値12mの円墳と推定され、周囲のものと比較して小振りなものの一群に入る。遺構確認面における周溝の幅員平均値は1.93mであり、南側がやや広いのに対して、東側が平均値を下回るものとなっている。但し、溝の深さは、遺構確認面より80cm前後とほぼ一定している。周溝内の堆積土は、褐色土あるいは暗褐色土に若干のローム粒子が含まれるもので、自然堆積を示している。

埋葬施設は、円墳のほぼ中央に東西方向で設置された木棺直葬1ヵ所のみであった。周溝内土壙は確認されていない。土壙の規模は、長さ5.10m幅1.50m前後のものであった。また、埋葬に用いられた木棺は、長さ3.58m幅0.33m前後のものであり、小口を粘土によって押さえ設置されていた。副葬されていた鉄鏃の位置ならびに出土状況からみて、頭位は東側と推定される。遺構内からは、2点の鉄鏃以外、全く発見することができなかった。（ｃｆ．第6図）

なお、本調査区周辺には、62基から構成される吉野古墳群が知られている。従って、本古墳についてもこれに倣い、吉野古墳群63号墳（以下、63号墳と略記する）と呼称することとしたい。

［発見された遺物］

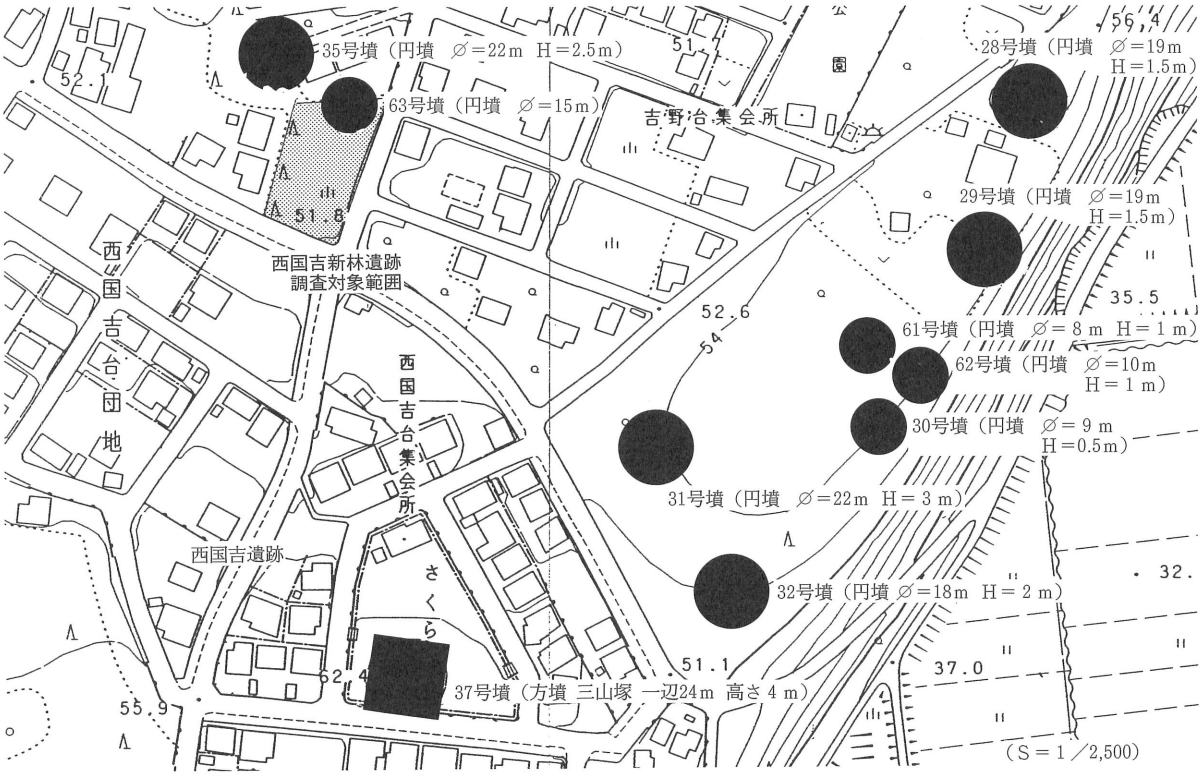
63号墳の調査によって出土した遺物は、鉄鏃2点、須恵器2点、土師器4固体（14点）、チャート2点の合計30点に過ぎなかった。この内図示し得たものは、第6図に掲げた5点に過ぎなかった。なお、図示しなかった須恵器1点は、甕の小片である。また、土師器2固体は、甕の破片と考えられる。主体部より出土した遺物は鉄鏃2点のみであり、他は総て周溝内より出土している。鉄鏃2点は、先端を西向きに揃え、木棺のほぼ中央やや西側から発見されている。棺底に近い位置の出土と考えている。1は全長12.5cmの剣身系長頸鏃、2は全長11.9cmの片刃系長頸鏃である。

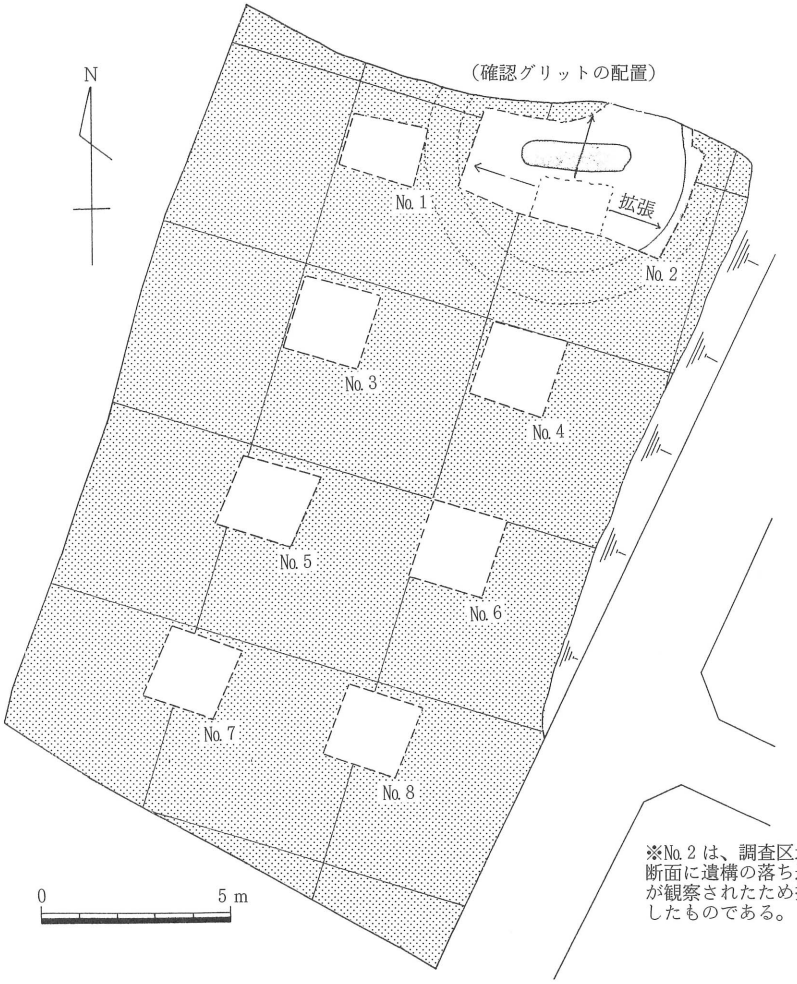
周溝内より出土した遺物は、4に掲げた土師器杯1点を除き、いずれも遺構埋没土上層において発見されている。3の須恵器は、口縁部推定径13.0cmを計る。内外面に自然釉の付着が観察され胎土に比較的粒の大きな石英粒が含まれている。4は周溝底部より出土している。口径15.9cm底径7.7cm、器高7.4cmを計る。内外面に赤彩を施している。5の甕の出土状況は、墳丘からの転倒を示唆している。口縁部径18.8cm、頸部径14.9cm、器高28.2cmを計る。また、胴部最大径24.0cmは、地付きより15.0cm前後と比較的に低い。

［63号墳築造の時期］

63号墳築造の時期を示す資料としては、棺内副葬品の鉄鏃2点、周溝底部より出土した土師器杯などをあげることができる。5世紀末から6世紀前半に位置付けておきたい。

Ⅱ　西国吉新林遺跡





※吉野35号墳　境頂部に金比羅神社が祀られている。

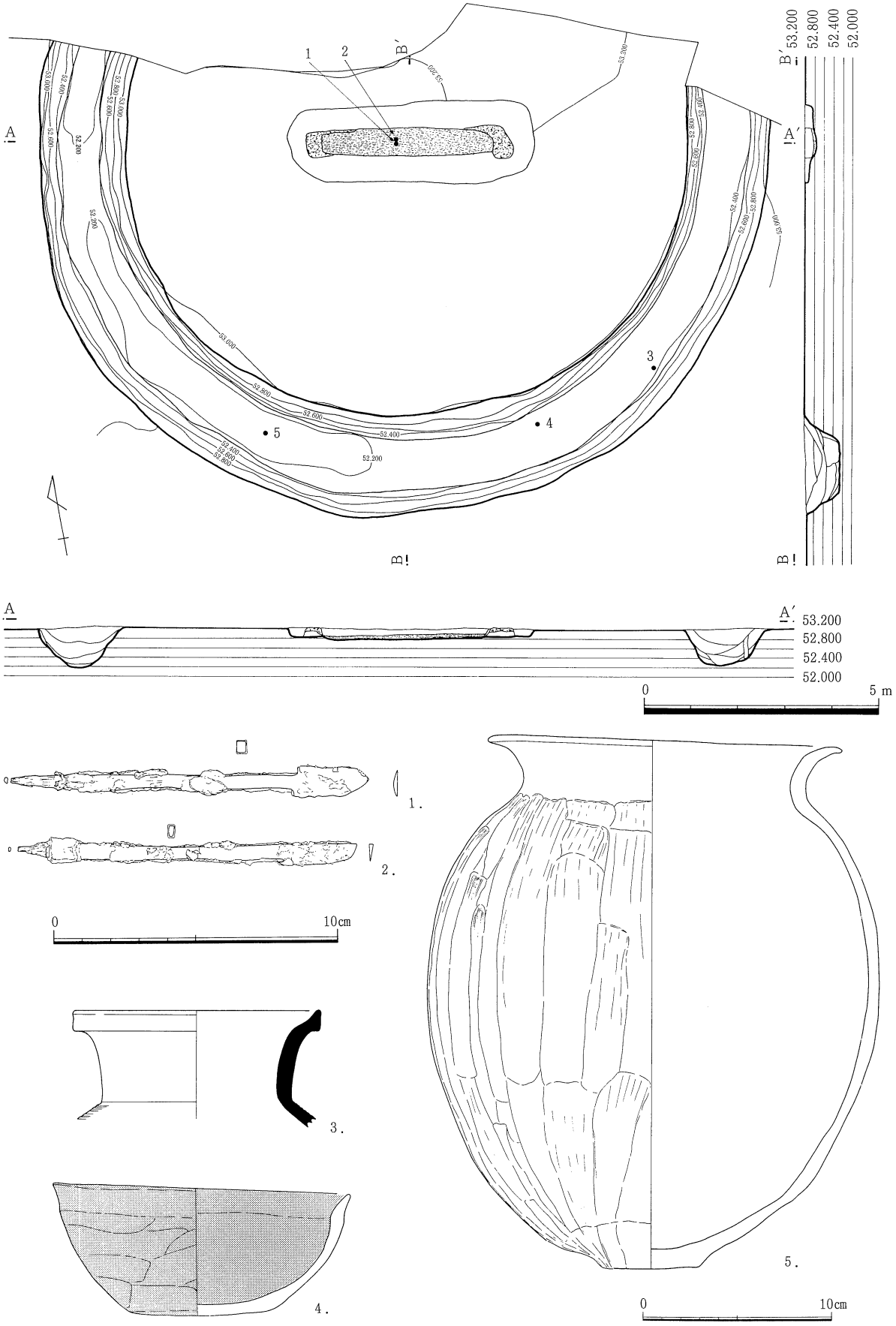
※No.2は、調査区北側断面に遺構の落ち込みが観察されたため拡張したものである。

確認調査面積

No.1＝6㎡　No.2＝60㎡
No.3＝9㎡　No.4＝9㎡
No.5＝9㎡　No.6＝9㎡
No.7＝9㎡　No.8＝9㎡

TOTAL＝120㎡

第5図　西国吉新林遺跡全体図



第６図　吉野63号墳と出土の遺物

Ⅲ　姉崎六孫王原遺跡Ｆ区

［これまでの調査］

姉崎六孫王原遺跡では、Ｆ区の調査以前にＡ～Ｅ区の調査（木對和紀1994・近藤敏1994・高橋康男1992）ならびに毛尻遺跡の調査（八角憲章ほか1983）が行われてきており、北側の集落遺跡と南側の墓域とから構成されることが明らかとなってきている。殊に、Ｆ区に隣接するＤ区の調査では、方形周溝墓群の存在が明らかとされており（近藤敏1994ほか）、墓域がＦ区に及ぶことが、調査開始時点で十分に予測された。また、調査区の南側に姉崎古墳群最終段階の前方後方墳である六孫王原古墳の周溝が含まれていることも、1970年以降の数次にわたる調査（中村恵次ほか1975・近藤敏1994ほか）等によって明らかであった。（ｃｆ．第７図）

今回の調査では方形周溝墓群の広がりを明らかにすると供に、六孫王原古墳の範囲の確定と周溝断面の形態把握を行った。

［調査開始時点での現況と地形］

調査開始時点における現況は、畑地であった。部分的に耕作が継続されていたため、作物を避けてトレンチを配したが、№12トレンチのみは周溝北西コーナーを明らかにするため、耕作者の理解を得て作物の撤去を行った。調査区域内の地形はほぼ平坦であり、25㎝コンター図において、僅かに西下がりの傾向を示しているに過ぎない。なお、各トレンチとも遺構確認面が比較的に高く、調査区全域にわたって、耕作土下層に漸移層が明瞭には確認されなかった。六孫王原古墳の周溝内埋没土の堆積状況などからみて、墳丘構築時点に旧表土層などの削平が行われたものと考えられる。

［発見された遺構］

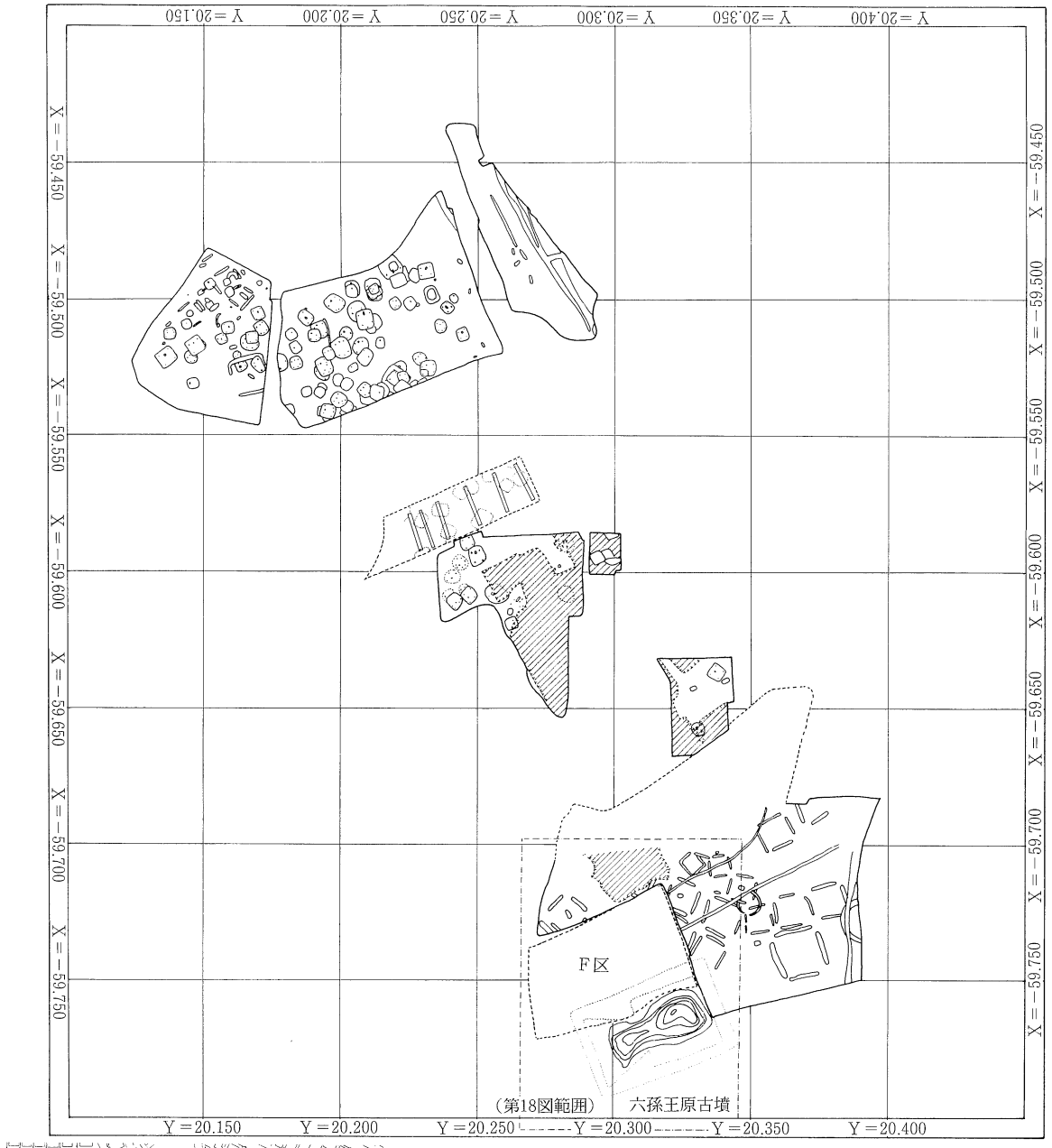
確認された遺構は、縄文時代早期の炉穴１ヵ所、弥生時代中期～後期の方形周溝墓の溝５ヵ所（４基分）、古墳時代終末期の前方後方墳（六孫王原古墳）の周溝６ヵ所（１基分）、時期不明の溝７ヵ所（２条分）の８遺構であった。なお、方形周溝墓についてはＤ区の調査結果から、トレンチでは確認することのできなかった３基が予測された。また、六孫王原古墳の周溝部分の確認調査では、周溝外側に緩やかな削り出し状の広がりの存在を確認したが、古墳の規模ならびに形態等について、新知見を加えるには至っていない。（ｃｆ．第８図・第９図）

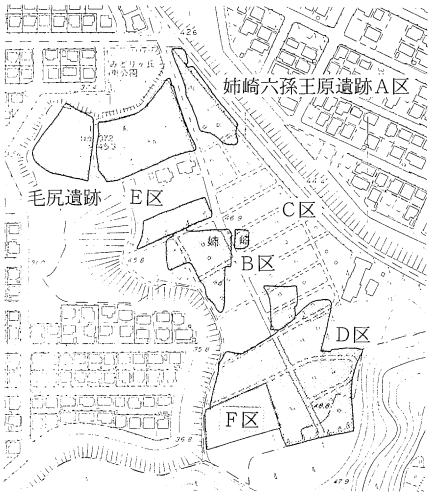
［発見された遺物］

全体的に遺物の出土量が少なく、また細片のため図示できるものがなかった。発見された遺物は、縄文式土器、弥生式土器、土師器、須恵器、陶磁器、鉄製品、鉄滓および礫であった。

縄文式土器には、早期のもの（条痕紋系繊維土器）と後期のもの（加曽利Ｂ式期～曽谷式）等が観られる。石器の製品は観られず、比較的に大振りの黒耀石を含むチップ数点が出土したに過ぎない。弥生式土器は量的に少なく、後期（久ケ原式）の甕の口縁部等を散見するに過ぎない。土師器には、あるいは、細片の中に当該期の資料を含むかもしれないが、古墳時代に確実に遡るものが観られない。中近世のかわらけや、内耳鍋の破片が観られる。須恵器の出土点数は、小片４点であった。恐らく杯類あるいは蓋類の破片であろうが、時期を限定することはできない。陶磁器には、天目茶碗や志野、摺り鉢などが観られる。鉄製品に、古代のものは認められない。なお、礫の中に鍛造薄片の付着しているものが観られる。鉄滓の出土と併せ、注目される。

Ⅲ　姉崎六孫王原遺跡Ｆ区



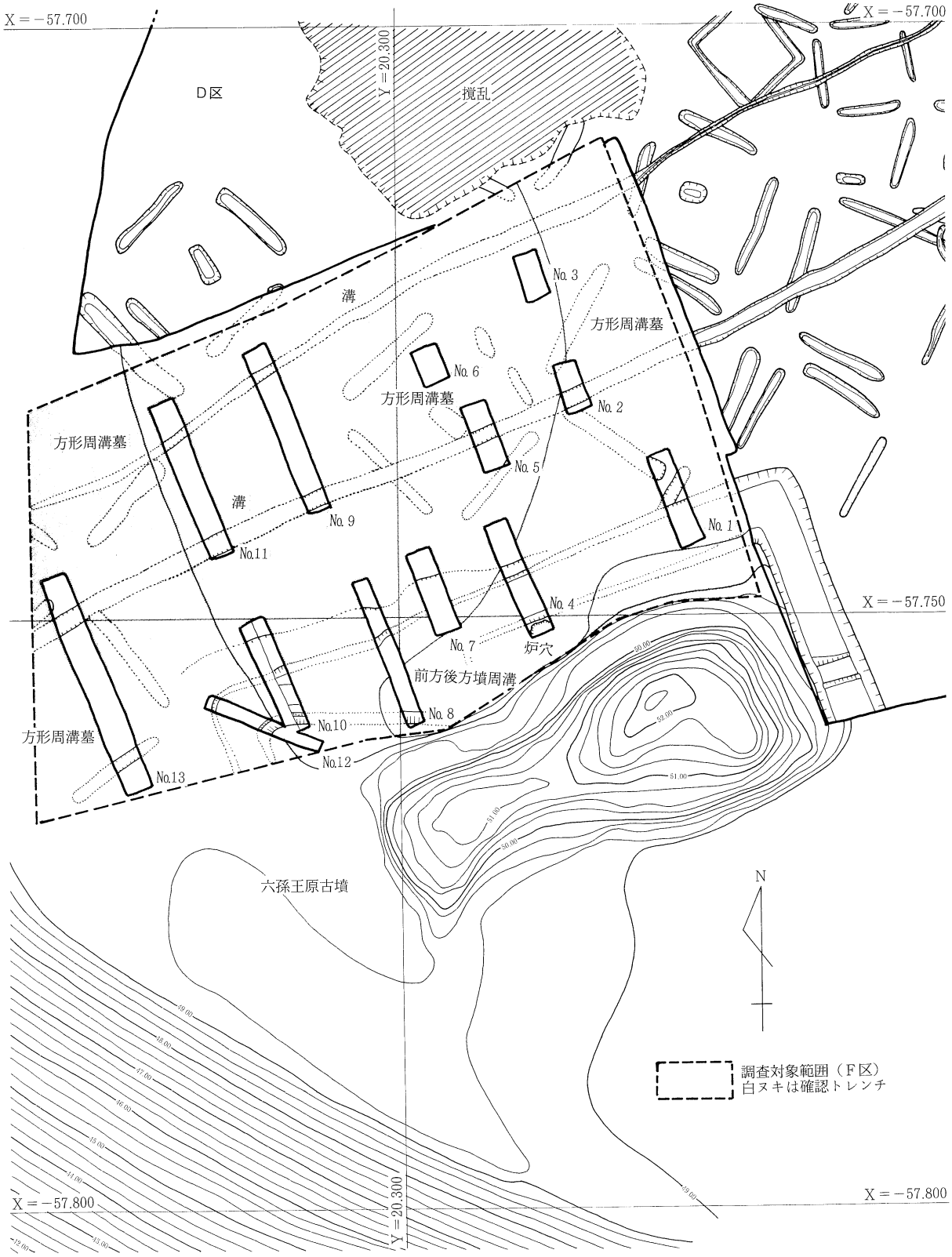


毛尻遺跡　　18軒の竪穴住居跡と４基の方形周溝墓などが検出されている。
　　文献　八角憲章ほか（1983）

姉崎六孫王原遺跡
　Ａ区・Ｂ区　弥生時代後期から古墳時代前期にかけての84軒の竪穴住居跡と単独の土壙墓４基などが検出されている。
　　文献　木對和紀（1994）
　Ｃ区　弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居１軒と２基の方形周溝墓などが検出されている。
　Ｄ区　弥生時代中期から後期の方形周溝墓19基。弥生時代中期の単独土壙墓２基などが検出されている。なお、方形周溝墓の中に盛土の残存していたものが１基含まれていた。
　　文献　近藤　敏（1994）ほか
　Ｅ区　弥生時代後期から古墳時代にかけての14軒の竪穴住居跡を確認した。
　　文献　高橋康男（1992）

第７図　姉崎六孫王原遺跡全体図

Ⅲ　姉崎六孫王原遺跡Ｆ区



確認調査面積

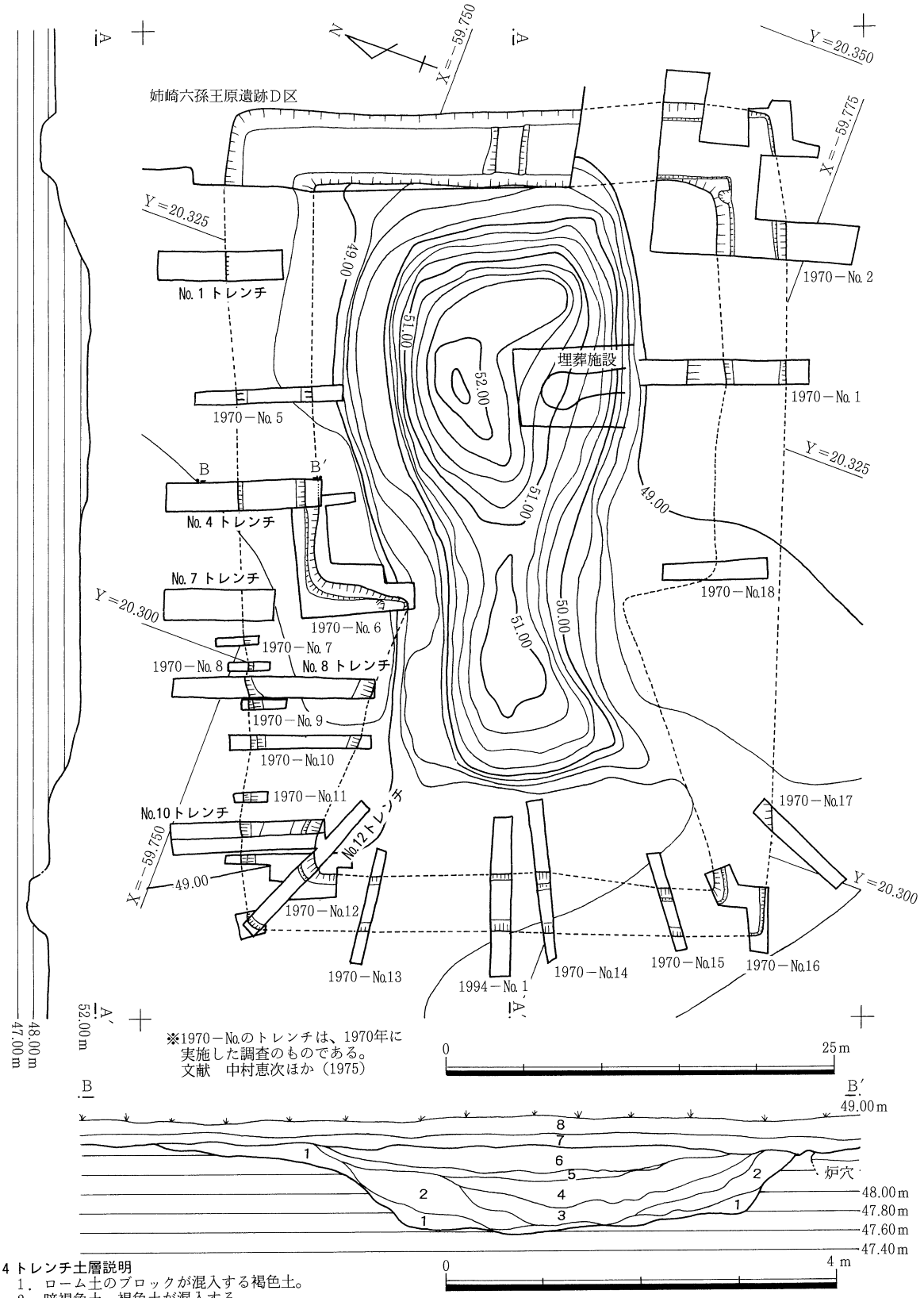
No. 1 ＝16㎡	No. 8 ＝13㎡
No. 2 ＝ 8 ㎡	No. 9 ＝28㎡
No. 3 ＝ 8 ㎡	No.10＝20㎡
No. 4 ＝20㎡	No.11＝26㎡
No. 5 ＝12㎡	No.12＝10㎡
No. 6 ＝ 6 ㎡	No.13＝36㎡
No. 7 ＝14㎡	

TOTAL＝217㎡

※六孫王原古墳の墳丘測量図は、『千葉県重要古墳群測量調査報告書－市原市姉崎古墳群－』千葉県教育委員会（1994）所収のものをベースとし加除を加えた。
※※調査区域内北半の遺構配置については、爾後の本調査の成果を参考とした。但し、確認調査の段階で確認し得た遺構のみを抜粋している。詳細は本報告書の刊行を待たれたい。

第８図　姉崎六孫王原遺跡Ｆ図全体図

Ⅲ　姉崎六孫王原遺跡Ｆ区



No.4 トレンチ土層説明

1．ローム土のブロックが混入する褐色土。
2．暗褐色土。褐色土が混入する。
3．明褐色土にローム粒が混入する。
4．黒色土に褐色土が混入する。
5．黒色土。しまりが良く、通路として利用されたか。
6．褐色土中に暗褐色土が混入する。焼土も含んでいる。
7．褐色土にローム土が混入する。
8．耕作土。

長軸にみる古墳の規模

周溝外側立上がり	52.53m	周溝内側立上がり	45.13m
周溝外側底面コーナー	51.15m	周溝内側底面コーナー	45.70m

第９図　六孫王原古墳全体図

Ⅳ　菊間深道遺跡Ｂ地点

［これまでの調査］

菊間深道遺跡周辺では、Ｂ地点の調査以前に、Ａ地点の調査（高橋康男1994）ならびに菊間遺跡・新皇塚古墳の調査（斎木勝ほか1974）が行われてきており、台地の北側先端に５世紀中葉の方墳（前方後方墳の可能性が指摘されている。）が築造されているほか、弥生時代中期から古墳時代前期の集落と、古墳時代後期ならびに平安時代の集落の営まれていることが、明らかになってきている。また、当該地域には、西側の東関山古墳、北側の権現山古墳（別称　北野天神山古墳）北東側の姫宮古墳などの前方後円墳の分布が知られている。（ｃｆ．第10図）

［調査開始時点での現況と地形］

調査開始時点における現況は、畑地であった。部分的に耕作が継続されていたため、東側では作物を避けてトレンチを配した。調査区域内の地形は、ほぼ平坦であった。遺構が耕作土直下に包蔵されていて、表土層から関東ローム層までの深さが50㎝に満たない。（ｃｆ．図版５－37，38）

［発見された遺構］

確認された遺構は、弥生時代中期から近世（菊間藩関連遺構）までのものである。時期的に連続しているとは考えにくく、Ⅰ期－弥生時代中期～古墳時代前期、Ⅱ期－古墳時代後期～奈良時代初頭、Ⅲ期－平安時代前期、Ⅳ期－近世末期以降の、４時期に大別されよう。竪穴式住居跡、土壙、円墳、溝などが確認されている。重複関係が複雑で遺構数や時期を特定することが難しいが、№１トレンチ－11遺構，№２トレンチ－６遺構，№３トレンチ－７遺構，№４トレンチ－１遺構，№５トレンチ－８遺構，№６トレンチ－９遺構，合計42遺構以上の遺構が240㎡の範囲で確認された。遺跡の広がりは、全域に及んでいる。

なお、№４トレンチにはロームブロックを用いた地業が確認されている。周囲の出土遺物や地元の伝承などを考慮に加え、菊間藩関連の遺構と推定した。また、№１トレンチ南端の竪穴式住居跡（ＳＩ－0001）については、遺構埋土を掘り下げて調査を行った。Ⅲ期の集落に係る住居跡であった。（ｃｆ．第１１図・図版５－33）

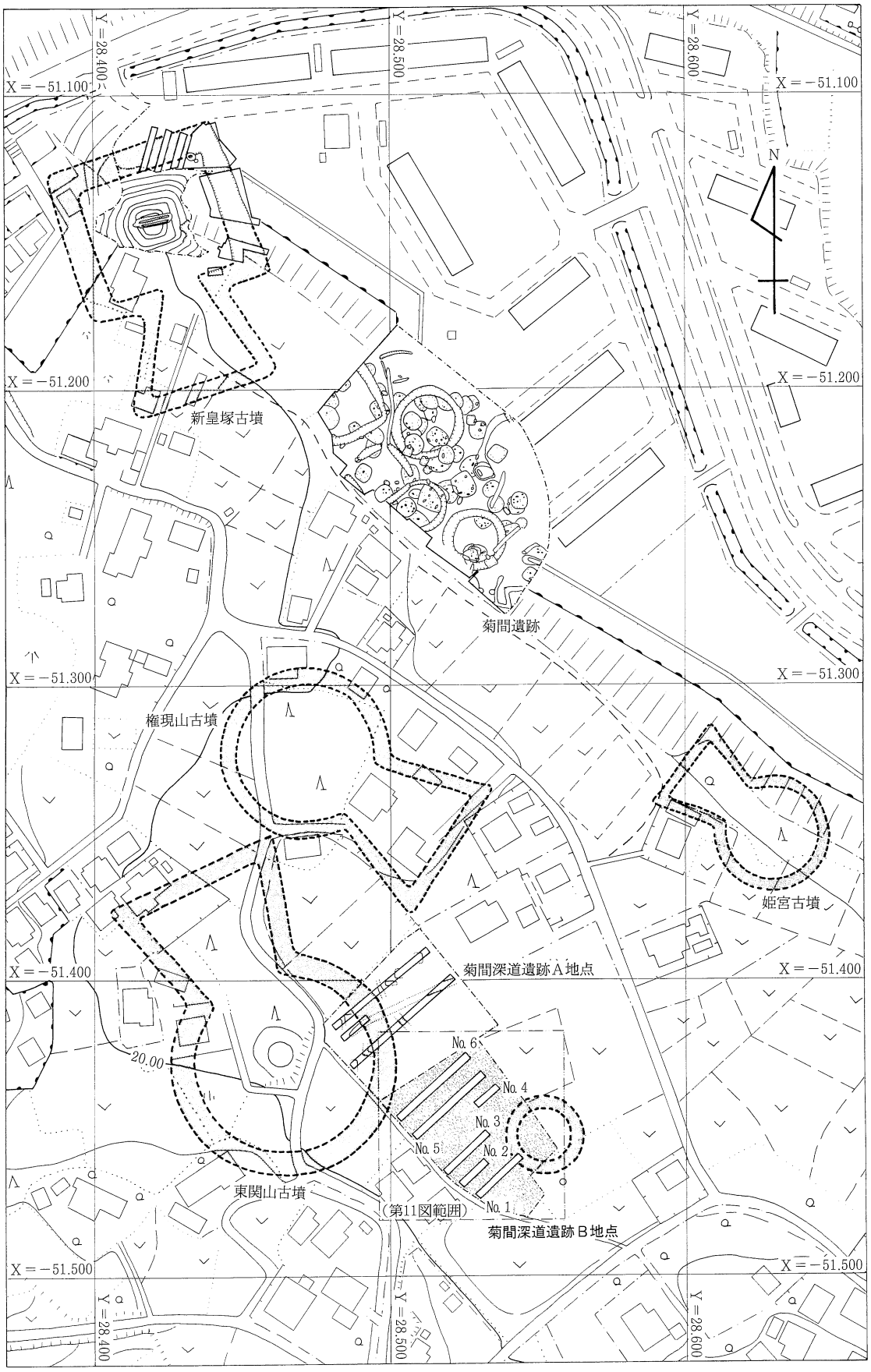
［発見された遺物］

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器（後期）・弥生土器（中期～後期）・土師器（古墳時代前期～）等の土器類95,886ｇ、須恵器（古墳時代～平安時代）642ｇ、鉄製品（近世）413ｇ、陶磁器（近世）848ｇ、礫・石器等（弥生時代～）4,455ｇ、総重量102,244ｇであり、94％弱が土器類であった。各遺物の出土頻度における傾向は、土器類が№１～２，６トレンチに集中する傾向があるのに対し、須恵器は№１～２に、陶磁器は№２～３，５に集中する傾向にある。なお、特筆すべき遺物として、土製勾玉や双孔円盤をあげることができる。

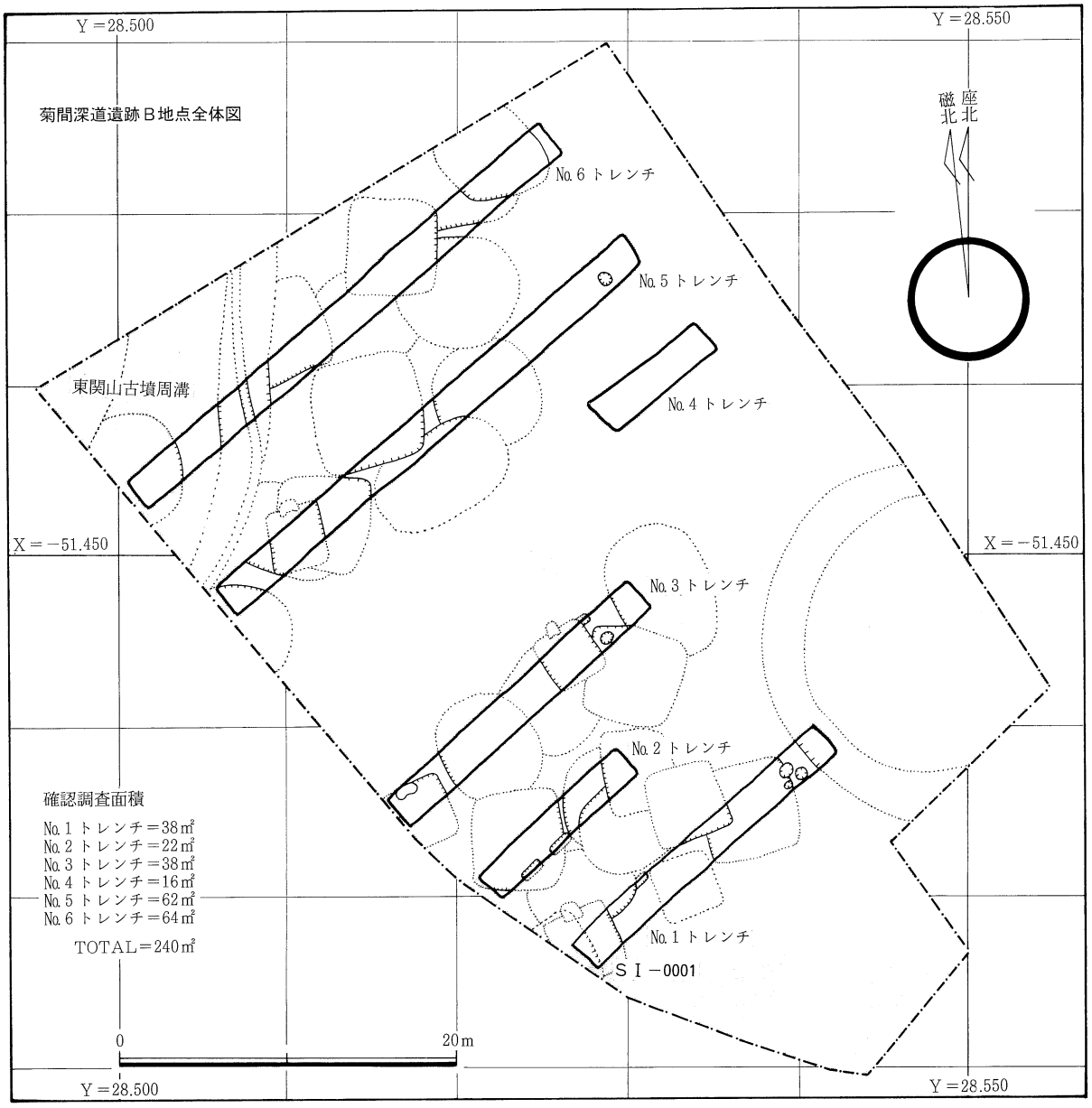
［遺跡の広がり］

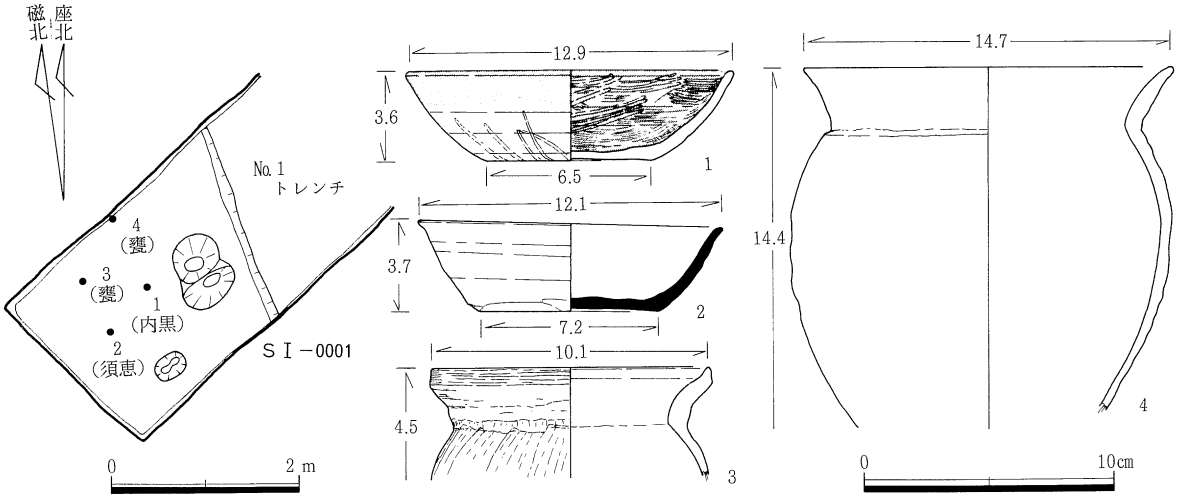
遺構の種類や広がり、時期や密度など菊間遺跡と類似する点が多く観られることから、当該台地上を菊間遺跡（－群）として一括的に捉えるべきであろう。なお、Ａ地点の調査で発見されたＶ字溝の延長を、今回の調査で発見することはできなかった。環濠集落に係る溝であるならば、菊間遺跡とは別の村を想定すべきかもしれない。

Ⅳ　菊間深道遺跡Ｂ地点

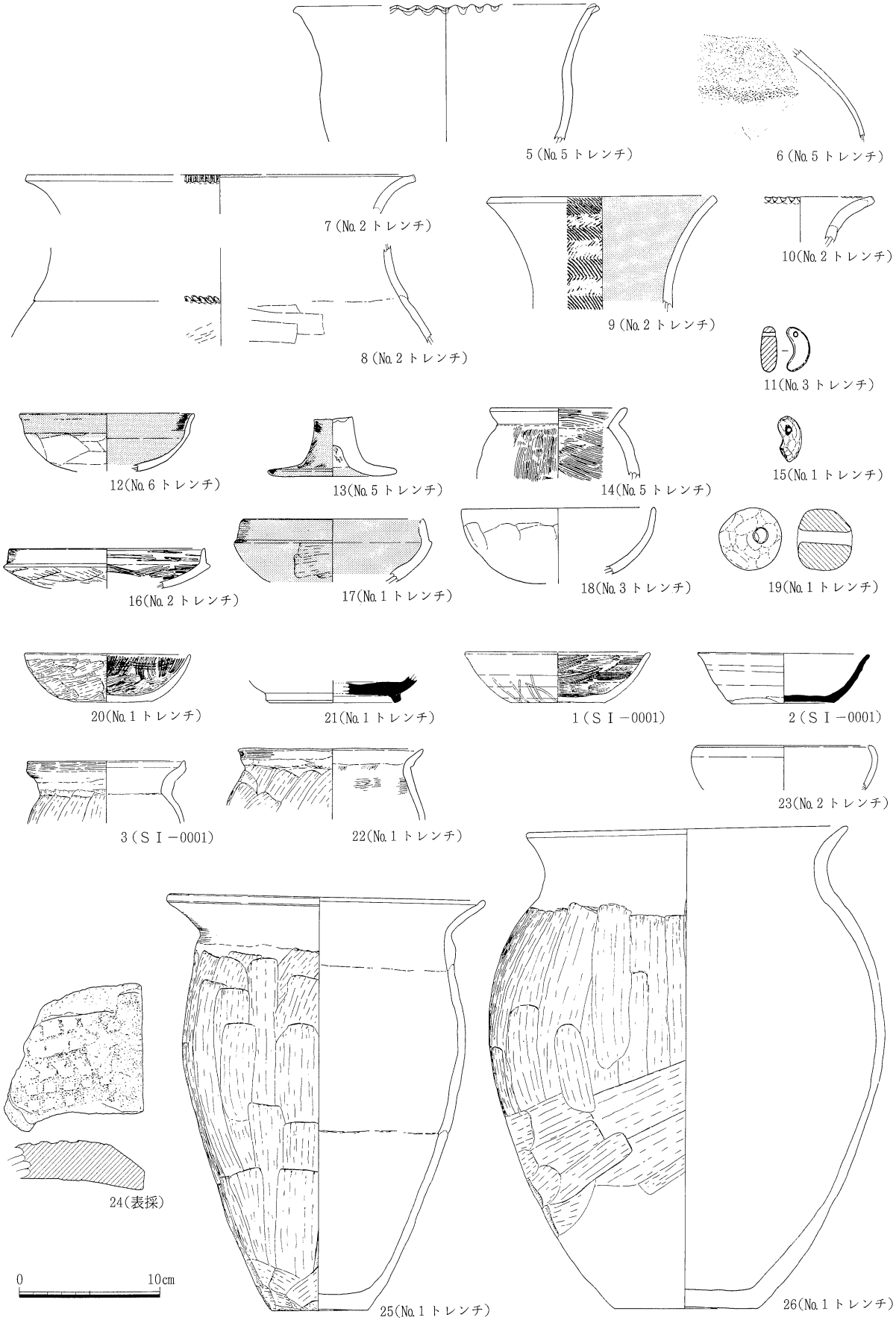


第10図　菊間深道遺跡全体図

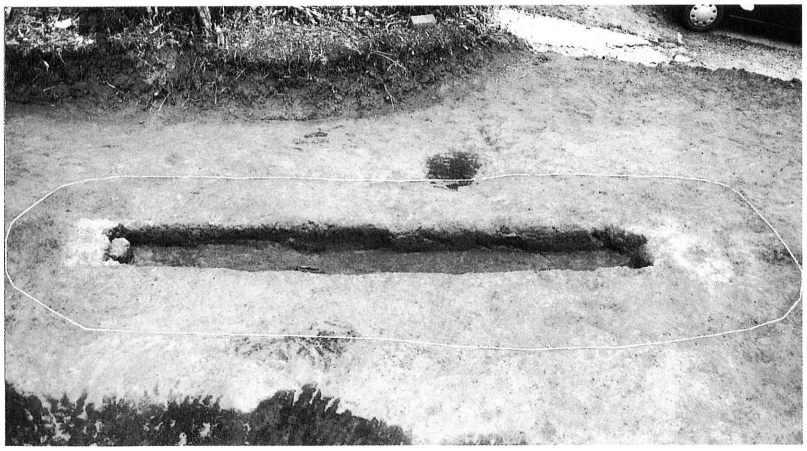




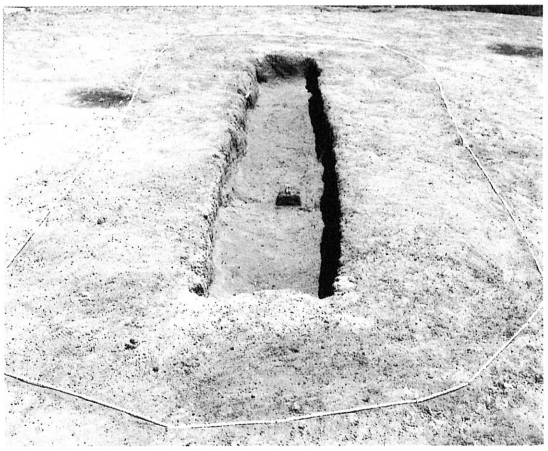
第11図　菊間深道遺跡Ｂ地点全体図とＳＩ－0001



第12図　菊間深道遺跡Ｂ地点出土の遺物



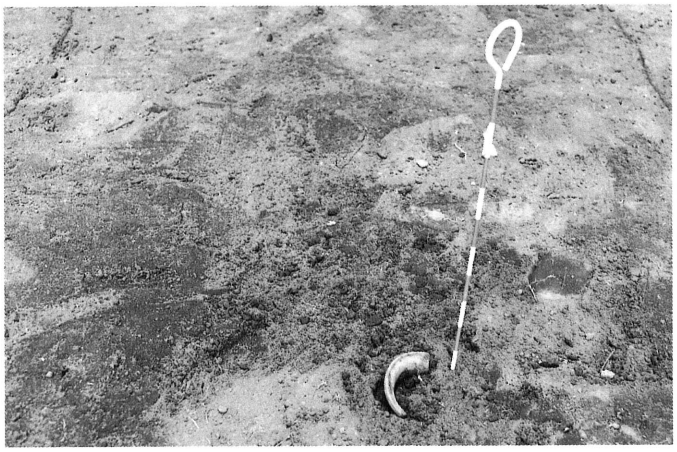
1．吉野63号墳主体部（南側から）



2．吉野63号墳主体部（西側から）

3．副葬された鉄鏃（西側から）

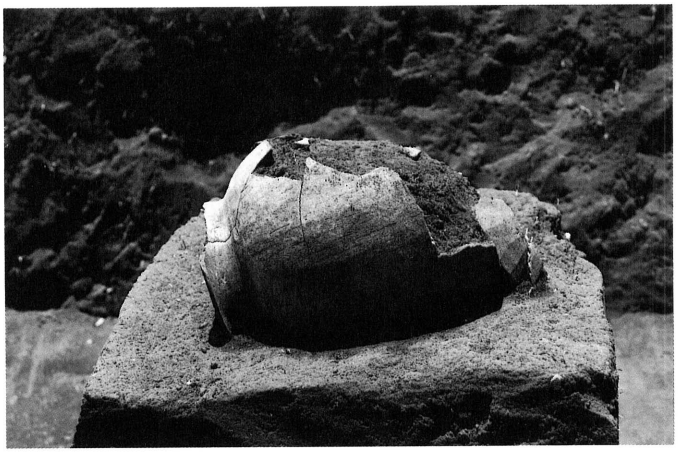
4．吉野63号墳全景（西側から）



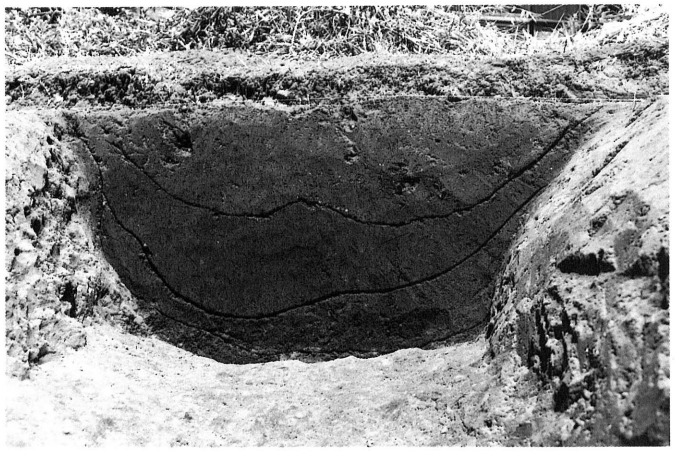
5．須恵器出土状況（南側から）

6．土師器杯出土状況（南側から）

7．土師器甕出土状況（東側から）



8．土師器甕出土状況（北側から）

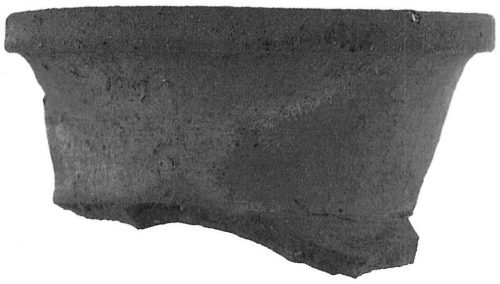


9．周溝西側土層堆積状況（南側から）

10．周溝南側土層堆積状況（西側から）

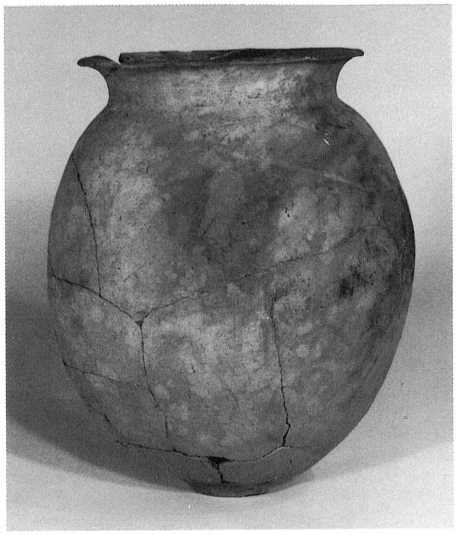
11．副葬品（鉄鏃）－1

12．副葬品（鉄鏃）－2

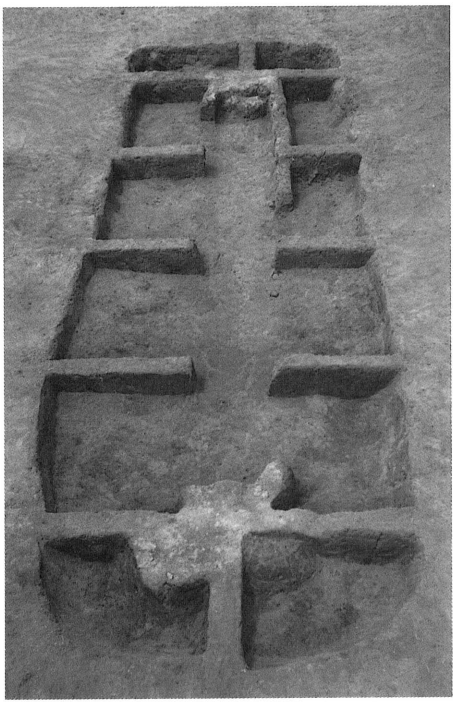


13．周溝出土品（須恵器）

14．周溝出土品（土師器杯）



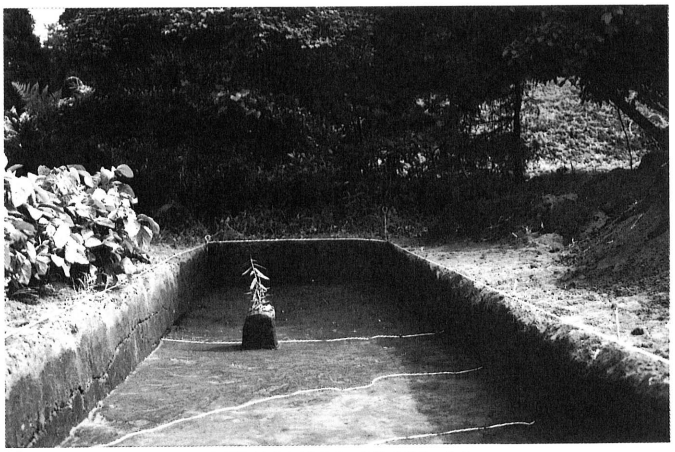
15．周溝出土品（土師器甕）



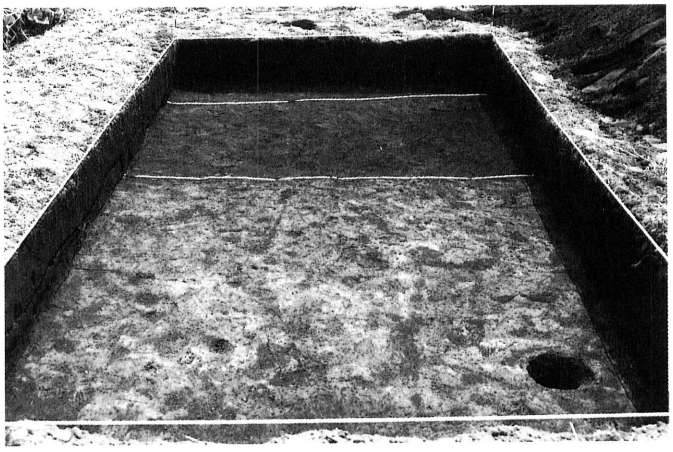
16．主体部掘方検出状況（東側から）

17. Ｆ区全景（西側上空から）

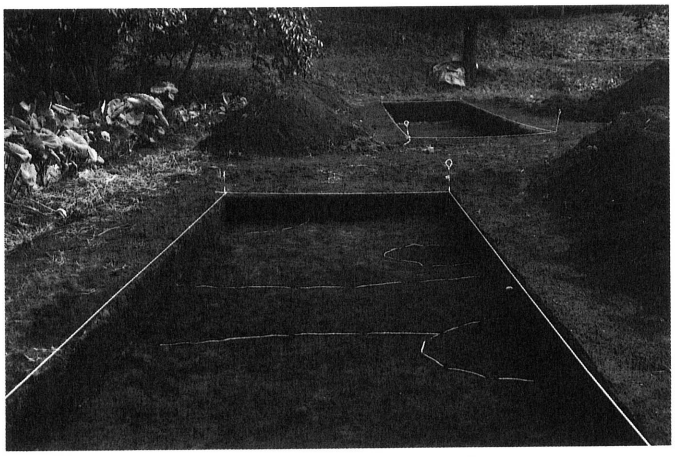
18. Ｆ区近景（西側から）



19. No.１トレンチ遺構確認状況（北側から）

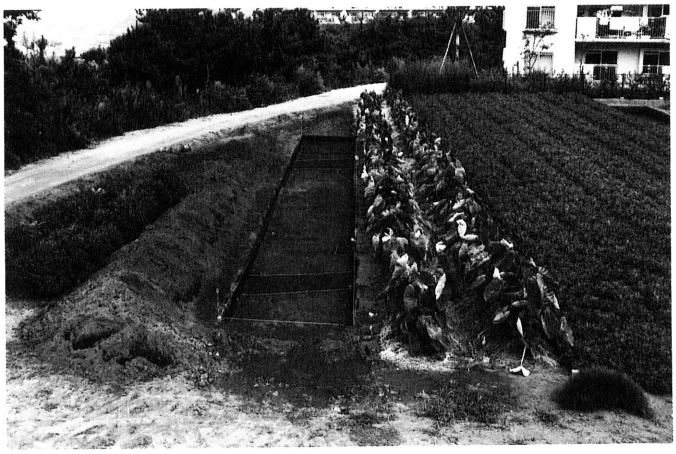


20. No.２トレンチ遺構確認状況（北側から）

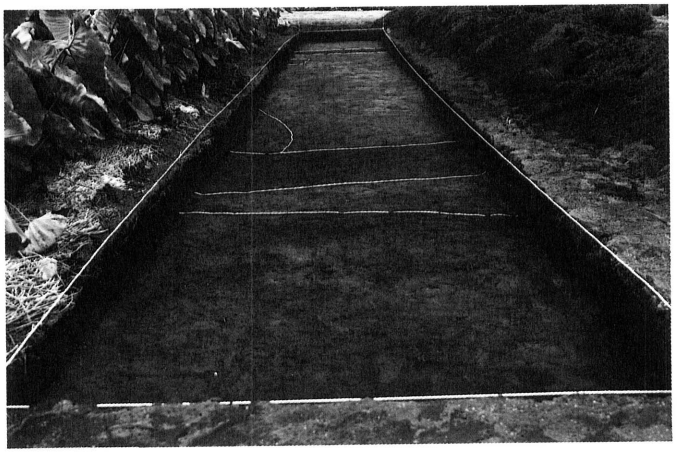


21. No.５トレンチ遺構確認状況（北側から）

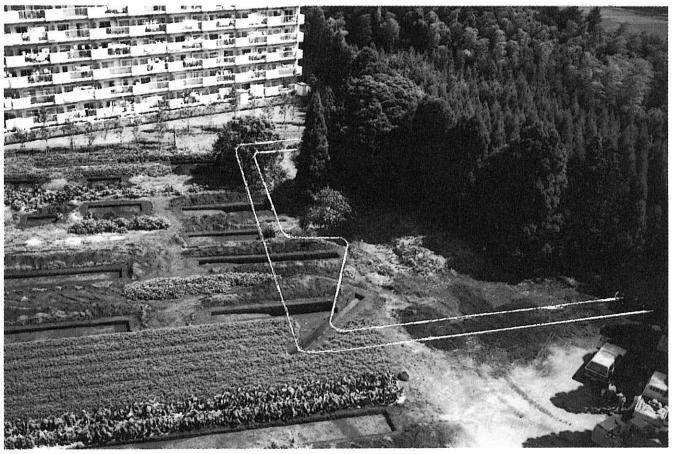
22. No.11トレンチ北側遺構確認状況（北側から）



23. No.13トレンチ遺構確認状況（南側から）

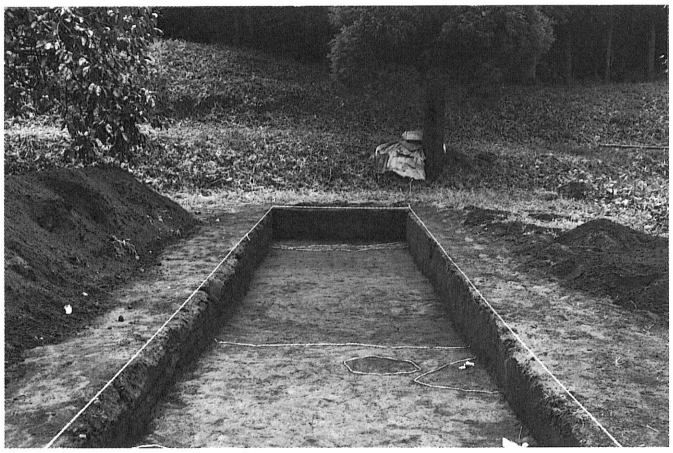


24. No.13トレンチ遺構確認状況（北側から）



25. 六孫王原古墳とトレンチ（西側上空から）

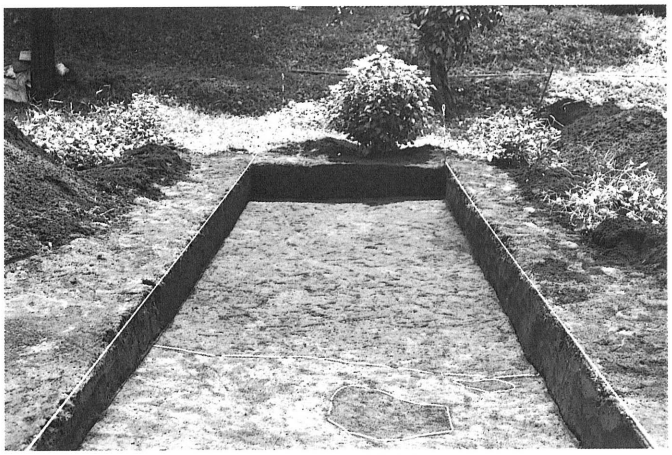
26. 六孫王原古墳近景（北西側から）



27. No.4 トレンチ遺構確認状況（北側から）

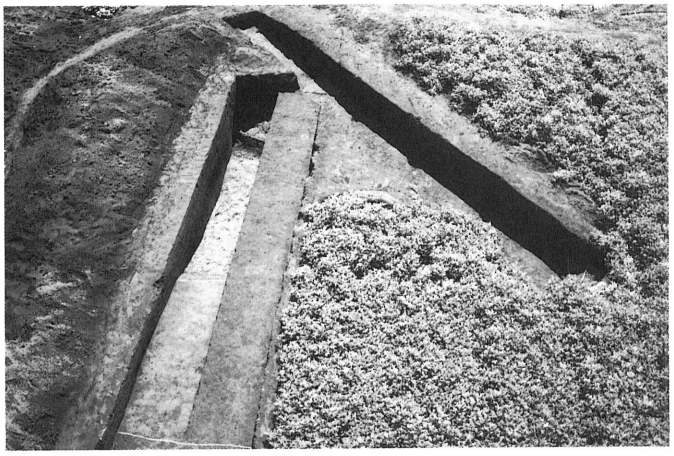
28. No.4 トレンチ周溝検出状況（北側から）

29. No.4 トレンチ周溝内土層堆積状況（北西側から）



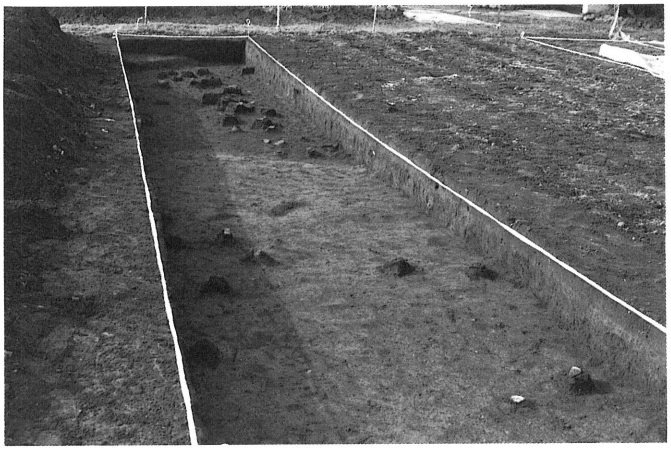
30. No.7 トレンチ遺構確認状況（北側から）

31. No.8 トレンチ周溝検出状況（北側上空から）

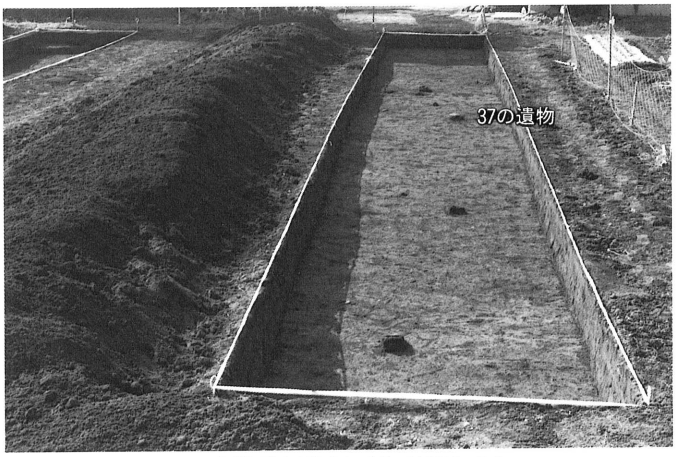


32. No.10 トレンチ周溝検出状況（北側上空から）

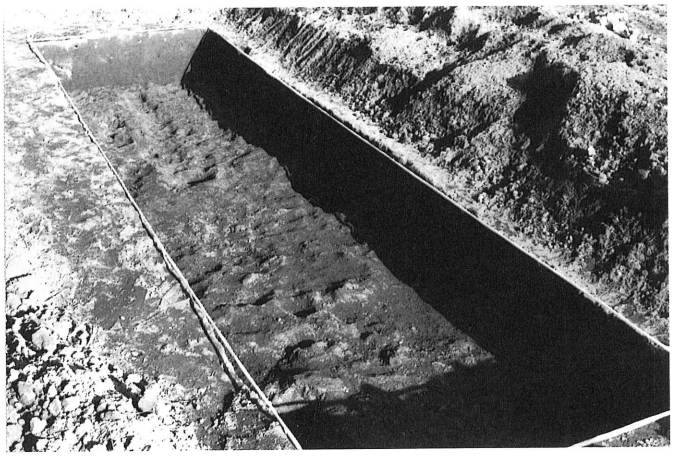
33. No.１トレンチＳＩ－0001検出状況（東側から）



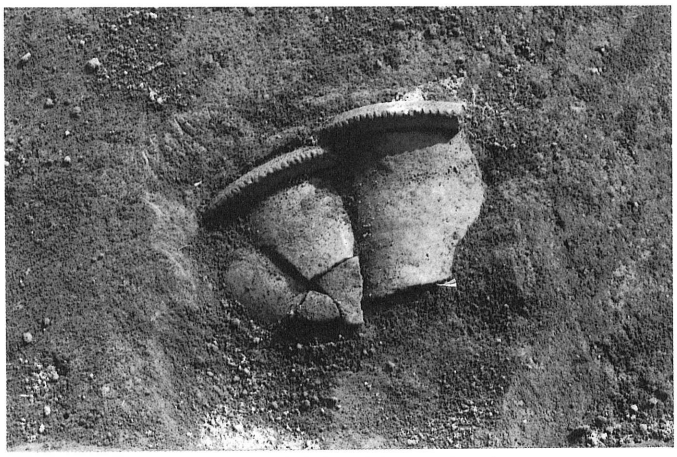
34. No.２トレンチ遺構確認状況（北東側から）



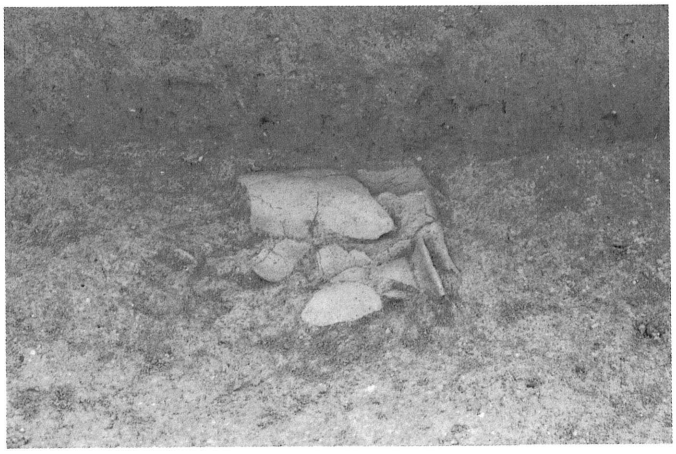
35. No.３トレンチ遺構確認状況（北東側から）



36. No.４トレンチ遺構確認状況（北東側から）

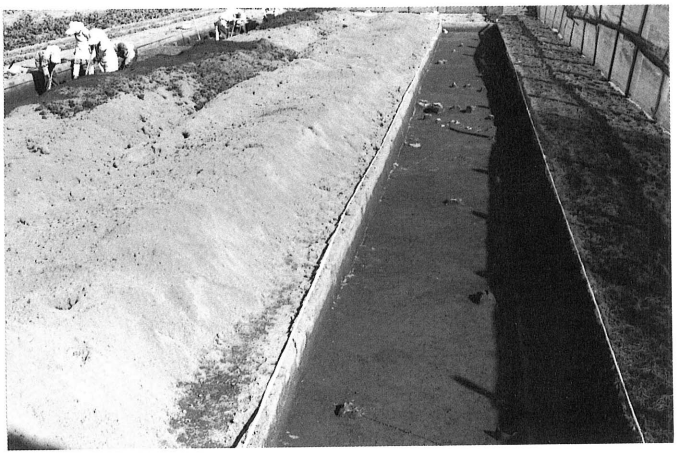


37. No.３トレンチ遺物出土状況（北西側から）

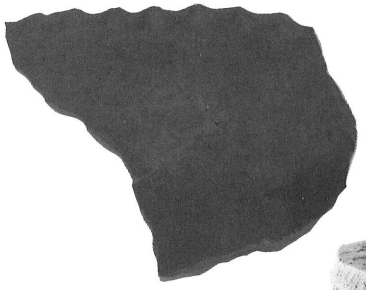


38. No.１トレンチ遺物出土状況（北西側から）

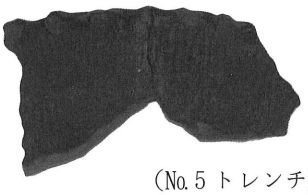
39. No.６トレンチ遺構確認状況（南西側から）



40. No.５トレンチ遺構確認状況（南西側から）

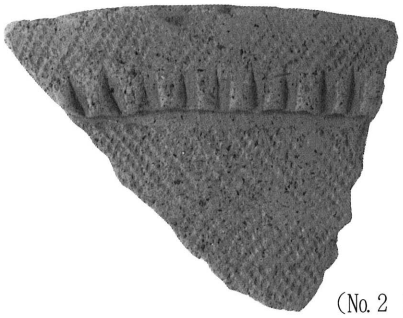


（図12－５）



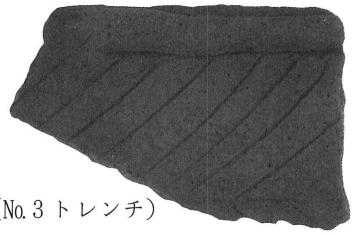
（No. 5 トレンチ）

（No. 5 トレンチ）

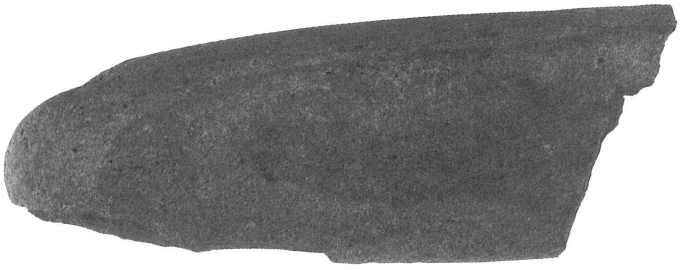


（No. 2 トレンチ）

（No. 3 トレンチ）



（No. 3 トレンチ）



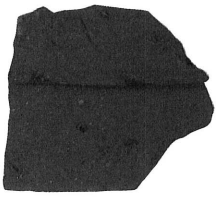
（No. 3 トレンチ）

（図12－11）

（図12－15）

（図12－19）

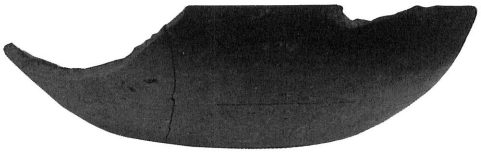
（図12－３）



（No. 5 トレンチ）

（No. 5 トレンチ）

（図11－２）

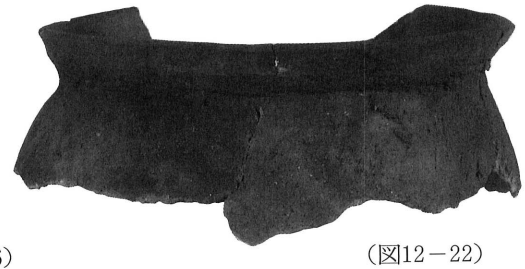


（図11－１）

（図11－４）

（図12－25）

（図12－26）



（図12－22）

報　告　書　抄　録

ふりがな	にしくによしししんばやしいせき　あねさきろくそんのーばらいせきえふく　きくまふかみちいせきびーちてん
書名	西国吉新林遺跡・姉崎六孫王原遺跡Ｆ区・菊間深道遺跡Ｂ地点
副書名	平成６年度市原市内遺跡発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番	
編著者名	田所　真
編集機関	財団法人市原市文化財センター
所在地	㊦２９０　千葉県市原市能満１，４８９番地　　TEL　0436－41－9000
発行年月日	西暦　１９９５年３月２９日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
にしくによしししんばやしいせき 西国吉新林遺跡	ちばけんいちはらしにしくによし 千葉県市原市西国吉 あざしんばやし 字新林	12219　129-63	35度 24分 7分	140度 7分 30秒	19940804－ 19940823	280	宅地造成と店舗建設に伴う事前調査
あねさきろくそんのーばらいせき 姉崎六孫王原遺跡 えふく Ｆ区	いちはらしあねさき 市原市姉崎 あざろくそんのーばら 字六孫王原	12219　338	35度 27分 40秒	140度 3分 25秒	19940824－ 19940920	217	個人による宅地造成に伴う事前調査
きくまふかみちいせき 菊間深道遺跡 びーちてん Ｂ地点	いちはらしきくまあざふかみち 市原市菊間字深道	12219　912	35度 32分 10秒	140度 8分 55秒	19941121－ 19941213	218	社会福祉施設建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺跡	特記事項
西国吉新林遺跡	古墳	古墳時代	円墳　１基 （木棺直葬）	副葬品－鉄鏃－　２点 周溝内－壺－　１点 －杯－　１点	吉野古墳群内 新規発見 吉野63号墳とする
姉崎六孫王原遺跡Ｆ区	墓域	弥生時代 古墳時代	炉穴　１基 方形周溝墓　７基 前方後方墳　１基 溝　２条	縄文式土器 弥生式土器 土師器 須恵器 陶磁器 鉄製品・鉄滓 礫	六孫王原古墳は、姉崎古墳群の終末期古墳。 ７世紀の中葉に位置付けられている。 礫に鍛造簿片の付着したものが観られる。
菊間深道遺跡Ｂ地点	集落	弥生時代 古墳時代 平安時代	竪穴式住居跡 竪穴式住居跡 竪穴式住居跡	弥生式土器 土師器・須恵器・石製模造品・土器勾玉 土師器・須恵器	隣接地に、菊間古墳群の東関山古墳（前方後円墳）が所在している。

平成６年度市原市内遺跡発掘調査報告
平成 7 年 3 月 23 日　印刷
平成 7 年 3 月 29 日　発行
編　集　財団法人　市原市文化財センター
市原市能満 1,489 番地
発　行　千葉県市原市教育委員会
市原市惣社1,040－1 番地
印　刷　三陽工業株式会社
市原市五井5,510－１番地